

仙台市文化財調査報告書第200集

四郎丸館跡

発掘調査報告書

1995年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第200集

四郎丸館跡

発掘調査報告書

1995年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しましては、日頃から多大なご協力をいただき、誠に感謝に絶えません。

本市の南東部に位置する四郎丸地区は豊かな田園風景が広がり、おもに近郊農業地帯として推移してまいりました。ところが、近年では市街化が急速に進み、仙台市のベットタウンとして生まれ変わりつつあります。

今回の四郎丸館跡の調査も、こうした市街化の流れの中で計画された宅地造成に伴って実施されたわけです。調査では、予想を越える大きな成果をあげることができました。なかでも特記すべき成果の1つが古墳時代前期の方形周溝墓の発見です。昭和58年に調査した戸ノ内遺跡の方形周溝墓と合わせて、当時の墓制の解明に大きな資料を提供したといえるでしょう。その他、平安時代の住居、中世の四郎丸館に関係すると思われる遺構、近世の絵図に載っている屋敷に関係する遺構なども発見されました。

本書はこのような調査成果を収録したものであります。その内容が今後の当地域の歴史の解明に役立てば幸いです。

最後に、調査ならびに本報告書の刊行に際して、地元の皆様や開発関係者のご支援ご協力をいただきましたことを記して深く感謝申し上げる次第であります。

平成7年3月

仙台市教育委員会

教育長 坪山 繁

例　　言

1. 本報告書は、宮城県仙台市太白区に所在する四郎丸館跡における宅地造成に伴う事前調査の報告書である。
2. 遺物整理・編集は、竹田幸司・渡部弘美があたり、執筆は渡部の補佐のもと竹田があたった。
3. 本書の文章・実測図中の方位は磁北で統一してある。磁北方向は真北に対して約7度20分西に偏る。
4. 検出遺構については、遺構略号を次のとおりとし、遺構種別に番号を付けた。
S A - 捜立柱跡 S B - 捜立柱建物跡 S D - 消跡 S I - 住居跡 S K - 土坑（井戸跡）
Pit - ピット
5. 本書掲載の図1は国土地理院発行 2.5万分の1『仙台東南部』『仙台西南部』『岩沼』『空港』を一部複製使用した。図2は仙台市都市計画課作成の『都市計画図』2.5千分の1を使用した。
6. 本書の記述による土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）に基づく。
7. 石製品の材質は東北大學教養部蟹澤聰史氏に鑑定していただいた。
8. 陶器器の鑑定は佐藤洋が行った。
9. 「名取郡北方四良丸邑」繪図の掲載に関して仙台市博物館の協力をいただいた。
10. 遺物実測図の刷スクリーントーンは黒色処理を示している。
11. 遺物観察表における数値の単位はcmであり、()の数値は現存値である。
12. 本書に関わる出土遺物・実測図・写真等の資料は仙台市教育委員会が…括して保管しているので活用されたい。

調　　査　要　項

遺跡の名称：四郎丸館跡（仙台市文化財登録番号C-536 宮城県遺跡登録番号 01240）

所 在 地：仙台市太白区四郎丸字戸ノ内93外

調　　査　主　体：仙台市教育委員会

調　　査　担　当：仙台市教育委員会文化財調査第二係

　　担当職員　試掘調査　篠原信彦　　本調査　渡部弘美　竹田幸司

調　　査　期　間：試掘調査 1993年6月1日

　　本　　調　　査　自1994年4月8日 至1994年6月30日

調　　査　対　象　面　積：約6000m²（発掘面積約1100m²）

発掘調査参加者：佐藤良正 針生せつ子 鈴木貴美子 大内孝子 小野きよ子 菊池和江 篠原良子

柴田徳郎 藤田光男 大内松夫 鈴木由美 上野美子 鈴木恵美 佐々木陽子

大友とみ子 大友泰子 伊東恵美子 伊藤清子

整　理　参　加　者：岩城いく子 菊池よしえ 相沢美佐子 高橋喜子 及川のり子 鶴田和子

田中つや子 渡辺まき子 昆イヨ 須藤敬子 南部節子 大内節子 佐藤悦子

佐藤紀子 佐藤剛 庄司大介 坂本千枝

調　　査　協　力：鶴福仙興業

目 次

序 文

例言・調査要項

第I章 調査に至る経過	1
第II章 四郎丸館跡の位置と環境	1
第III章 調査の方法と經過	2
第IV章 基本層序	3
第V章 発見遺構と出土遺物	6
1 住居跡	6
2 方形周溝墓	6
3 溝跡	12
4 土坑・井戸跡	26
5 掘立柱列・掘立柱建物跡・ピット	39
第VI章 遺物について	50
第VII章 遺構について	57
第VIII章 まとめ	59
引用・参考文献	64
写真図版	65

第Ⅰ章. 調査に至る経過

四郎丸館跡は、平安末期に藤原秀衡の家臣の名取四郎の居城として、後に曾我氏の居館となり、室町時代末期には伊達家家臣菅井和泉守実国が入った館跡といわれ、現在の善徳寺境内付近を主体とした水濠と土塁に幾重にもとり巻かれた平城形式の要害であったといわれている。昭和58年度に当遺跡を包含する戸ノ内遺跡で発掘調査が行われ、古墳時代前期の住居跡・方形周溝墓や中世の堀跡が発見されている。

遺跡の所在する地区周辺は近年急速に宅地化が進みつつある地域であるが田畠が多く残っており南方には広大な田園風景がみられる。そのなかにあって四郎丸館跡は更地あるいは畠地として遺跡の現状を保っていた。

当地における調査の協議開始は平成5年3月31日に提出された開発行為事前協議書であり、同年4月6日文化庁長官への届出と、試掘調査を条件として協議が成立した。協議に基づく届出は同年4月14日になり、6月1日試掘調査を実施した結果、本調査を必要とすることになった。本調査は平成6年度に実施することになり、その具体的な協議は平成6年2月25日と3月28日に行い、契約内容等を確認した。その結果、調査の開始は4月8日とすることになり、文化財保護法に基づく発掘調査の通知は4月4日付けで提出した。

第Ⅱ章. 四郎丸館跡の位置と環境

1. 位置と地理的環境

四郎丸館跡は、JR東北本線南仙台駅の東方3km、名取川と広瀬川の合流点より下流の1.8kmの名取川南岸の自然堤防上に位置する。遺跡範囲内での標高は2~4m前後である。

周辺の地形は、奥羽山脈の山形県境に源を発する名取川によって形成された名取平野に含まれ、氾濫による旧河道沿いあるいは現在の流路に沿って自然堤防が発達している。その自然堤防どうしの間に後背湿地や沼が複雑に入り組んでいる。東側は浜堤列が観察され、太平洋を臨む。南側は名取耕土となる広大な水田地帯が広がっている。そして、西側は奥羽山脈から派生し名取川によって開析された高館丘陵が延びる。

2. 歴史的環境

四郎丸館跡の所在する仙台バイパス以東の四郎丸・袋原地区で調査された遺跡としては、古墳時代前期の方形周溝墓と住居跡のほか四郎丸館跡に関連する堀跡が発見された戸ノ内遺跡、古墳時代前期と平安時代頃の住居跡が発見された昭和北遺跡、平安時代以前や中世の水田跡や溝跡が発見された後河原遺跡、古墳時代以降の居住域と生産域の関わりが確認された中田畠中遺跡がある。近隣には城丸古墳・弁天岡古墳などいくつかの小規模の古墳がある。弥生時代以

前の明確な遺構は検出されていないが、後河原遺跡から弥生時代の可能性のある水田跡が検出されている。また、戸ノ内遺跡から弥生土器、中田畠中遺跡から縄文土器が出土している。このように少しづつだが、この地区の歴史が明らかにされてきている。

以上が当地区の遺跡概要だが、さらに視点を大きくして丘陵部も含めた名取平野の北側地域でみると遺跡の数も調査件数も多くなる。縄文時代以前の遺跡は、大半が丘陵部に分布しており71棟の前期の堅穴住居跡が発見された今熊野遺跡、東北南部の縄文後期後葉の土器型式の標識になっている金剛寺貝塚などが知られている。平野部では明確な遺構は発見されていないが中田南遺跡などで縄文晩期の土器が出上している。弥生時代になると前期の遠賀川系類似土器が出土している安久東遺跡、天王山式の他に続縄文土器が発見された清水遺跡など平野部の自然堤防上にも遺跡が分布するようになる。

古墳時代になると遺跡の分布もさらに広がり、自然堤防上だけでなく浜堤上にも遺跡の分布がみられる。古墳時代前期に東北地方南部に移入された墓制である周溝墓が、自然堤防上に立地する安久東遺跡（前方後方形1基）で、丘陵上に立地する今熊野遺跡（方形9基）・五郎市遺跡（方形7基と円形1基）・西野田遺跡（円形2基）で発見されている。また同時期の古墳として、東北地方第一の規模を誇る雷神山古墳、5基の前方後方墳と2基の方墳からなる飯野坂古墳群、仙台平野で最古といわれる高館山古墳、割竹形木棺が検出された宇賀崎1号墳などがある。集落跡では、前述の今熊野遺跡や西野田遺跡のほか清水遺跡・宮下遺跡などがあげられる。また鶴巻前遺跡からは県内で最も古い時期とされる古墳時代前期の土師器より古い要素をもつ甕が出土している。後期の集落跡としては東遺跡・中田南遺跡がある。

奈良・平安時代の集落跡では中田南遺跡・清水遺跡・鶴巻前遺跡などがあげられる。中世以降になると前田館跡・熊野堂大館跡・高館城跡などの城館跡や、中田南遺跡・松木遺跡では屋敷跡が発見されている。松木遺跡では近世の屋敷跡も発見されている。

第III章. 調査の方法と経過

本調査では調査区の任意の南北方向に基準線を設け、3m×3mを1単位としたグリッドを設定した。南北方向にアラビア数字、東西方向にアルファベット文字で表わし、両者の組み合わせでグリッド名を表わした。南北グリッドは磁北に対して東に7度30分偏る。東側をAトレンチ、北側をBトレンチ、西側をCトレンチとした。調査対象面積6000m²のうち道路部分の約1100m²を調査した。調査区全体を重機で基本層位VI層（黄褐色シルト）まで排土し、人手によって遺構確認を行った。調査中、遺構測量の際に簡易造り方測量を用い、縮尺20分の1の平面図を作成した。土層断面図、エレベーション図に関しても縮尺20分の1を用いた。



番号	遺跡名	性質	立地	年代	番号	遺跡名	性質	立地	年代
1	西澤古跡	周防古墳群	自然地勢	古墳群・古墳・古墳・古墳	16	清水遺跡	史跡	自然地勢	平安
2	戸内遺跡	周防古跡	自然地勢	丘陵・古墳群・平野・中野	18	野村山遺跡	史跡	自然斜面	平安
3	中野原古跡	周防古跡	自然地勢	丘陵・平野	19	野村山遺跡	史跡	自然斜面	古墳・平安
4	野村北遺跡	周防古跡	自然地勢	丘陵・平野	20	鷺ノ瀬遺跡	史跡	自然地勢	古墳
5	佐川原遺跡	水田跡	自然地勢	丘陵・平野	21	鷺ノ瀬遺跡	史跡	自然地勢	平安
6	中庄塗古跡	周防古跡	自然地勢	丘陵・半平	22	金剛日原	古墳	丘陵	平安・後・盛
7	安久原遺跡	周防古跡	自然地勢	丘陵・近海	23	十日月遺跡	古墳	丘陵	平安
8	坐逆塚	周防古跡	自然地勢	丘陵・平野	24	轟原山古墳	古墳	丘陵	古墳
9	原逆塚	周防古跡	自然地勢	丘陵	25	無穴古墳群	古墳	丘陵	古墳
10	松木遺跡	周防古跡	自然地勢	丘陵	26	轟原山古墳	古墳	丘陵	古墳
11	井ノ瀬古跡	古墳	自然地勢	古墳	27	手形町古墳	古墳	丘陵	古墳・後
12	杭丸古墳	古墳	自然地勢	古墳	28	高須遺跡	城跡	丘陵	平安
13	桃谷大原山古墳	古墳	自然地勢	古墳	29	辻原山大塚跡	城跡	丘陵	平安
14	今野古跡	古墳・塚古跡	自然地勢	古墳・丘陵	30	御井十塚跡	古墳地	沖積平原	古墳・朝・平安
15	云津市遺跡	周防古跡	丘陵	地形・古墳群	31	御井上遺跡	古墳地	自然地勢	古墳・朝・平安
16	四河田遺跡	周防古跡	丘陵	丘陵・盆地・古墳・古代	32	下南山遺跡	古墳跡	自然地勢	古墳・古代
17	芦下遺跡	古墳跡	丘陵	高見・佐生・古代	33	御所原駁社	神跡	丘陵平原	古墳・古良・平安

図1 周辺の遺跡



図2 調査区位置図(黒塗り部分試掘トレンチ)

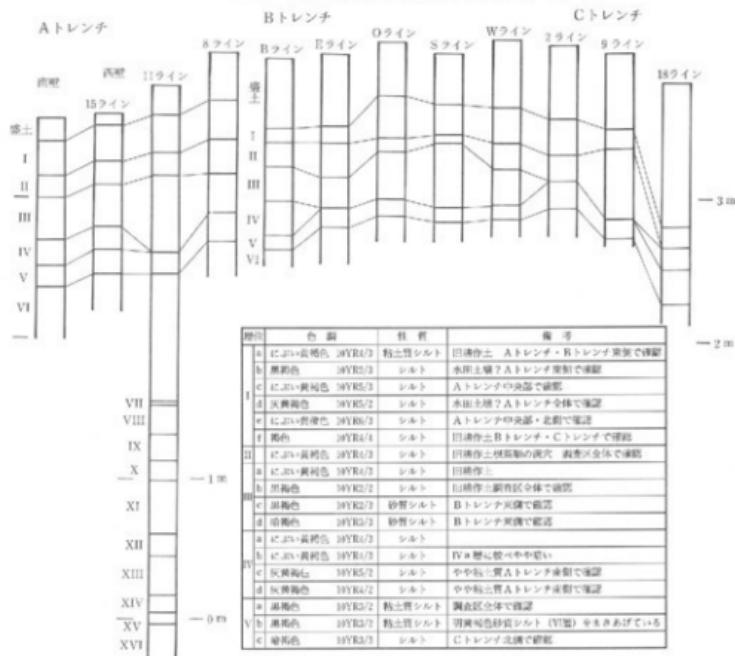


図3-1 土層柱状図

第IV章. 基本層序

最終遺構確認面まで6枚の層を確認した。VI層以下はSK4井戸跡を裁ち割りして確認した。

盛土 旧耕作土の上に10cm~100cmの厚さに盛土されている。

I層 耕作土及び水田土壤でにぶい黄褐色及び灰黄褐色のシルトである。

II層 耕作土で厚さが10~20cmあるが、耕作による天地返しが行われている部分では50~90cmの厚さを計る。にぶい黄褐色シルトである。近世の陶器・磁器及び明治後半の色絵の磁器が出土している。

III層 黒褐色シルトで層厚は20~50cmで、Cトレンチの一部でII層の影響で確認されない所もある。この層の上面でSK3井戸跡を確認している。中世陶器が出土している。

IV層 灰黄褐色シルト(粘土質)で層厚20cm前後である。Aトレンチの南側で確認される。

V層 黒褐色粘土質シルトで層厚10~20cmである。この層よりSD2・3・4・6・23・28・43溝跡・小溝群②(SD34)などが確認されている。

VI層 明黄褐色砂質シルトで層厚90cmである。多くの遺構はこの層の上面で確認した。

VI層以下からは遺物の出土、遺構の検出はなかった。

VII層以下は注記表を参照

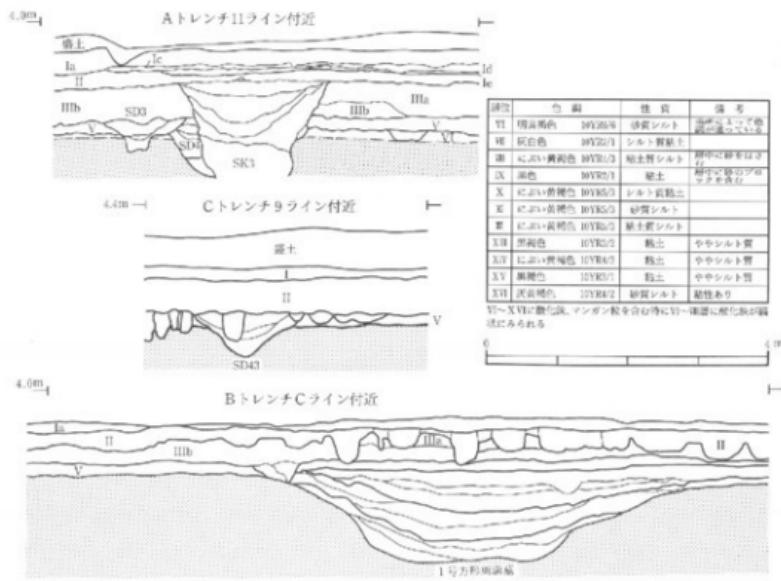


図3-2 基本層序

第V章. 発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は、住居跡1棟、方形周溝墓3基、溝跡37条（小溝状遺構群）、土坑18基、井戸跡17基、掘立柱列5列、掘立柱建物跡4棟、ピットである。

1. 住居跡（S+1住居跡）

〔遺構の確認〕 Aトレント北端、M・N-1・2区に位置する。

〔遺構の重複〕 小溝群①（SD14・19・20・21）を切って、ピットに切られている。

〔形態・規模〕 北東部で削平をうけ南西部は調査区外にのびるため、全容は判明しなかったが、隅丸方形を呈していると考えられる。規模は、東西辺中央で3.5m・南北辺中央で4.2mを計る。床面積は14.7cm²を有する。深さは残りのいい所で10cmである。南北軸は磁北に対して20度東へ偏る。

〔堆積土〕 2層に分層される。1層は灰白色火山灰を含む暗褐色粘土質シルトで、2層は暗褐色砂質シルトの層である。

〔床面〕 住居掘り方埋土を床面としており、平坦である。

〔壁・周溝・柱穴〕 煙はゆるやかに立上がる。残存壁高は0～10cmである。周溝・柱穴は検出されなかつた。

〔貯蔵穴状ピット〕 カマドの南側で貯蔵穴状ピットを1基検出している。規模は短軸70cm・長軸80cmの長方形を呈しており深さは20cmである。断面は逆台形である。埋土より土師器坏が出土している。

〔カマド〕 東壁中央部に設置されている。煙道部は長さ100cm・幅30cmを計り、底面はほぼ平坦で、先端部は一段低くなっている。燃焼部の床面は熱のため赤変しており堅くなっている。

〔出土遺物〕 床面・貯蔵穴状ピット・カマド・堆積土より出土している。同示資料は土師器坏2点・赤焼土器坏6点である。そのうち土師器坏1点、赤焼土器坏2点がカマドから3枚重ねの裏返しで出土している。カマドより礫が出土している。

2. 方形周溝墓

1号方形周溝墓（SD13溝跡）

〔遺構の確認〕 BトレントのB～J-0～-2区で確認された。

〔遺構の重複〕 SD11・SK18・19に切られている。

〔平面形・規模〕 周溝は北側の調査区外にのびているため、検出できたのは南側部分（南東辺・南西辺）だけで、隅が確認できるのは南部分1ヶ所である。平面形は方形と推定されるものの、東西軸26m以上・南北軸6m以上ということが判明するだけである。ただし、北側の試掘部分および2号方形周溝墓まで周溝がのびていないことよりその規模は30mを越えないと推定され

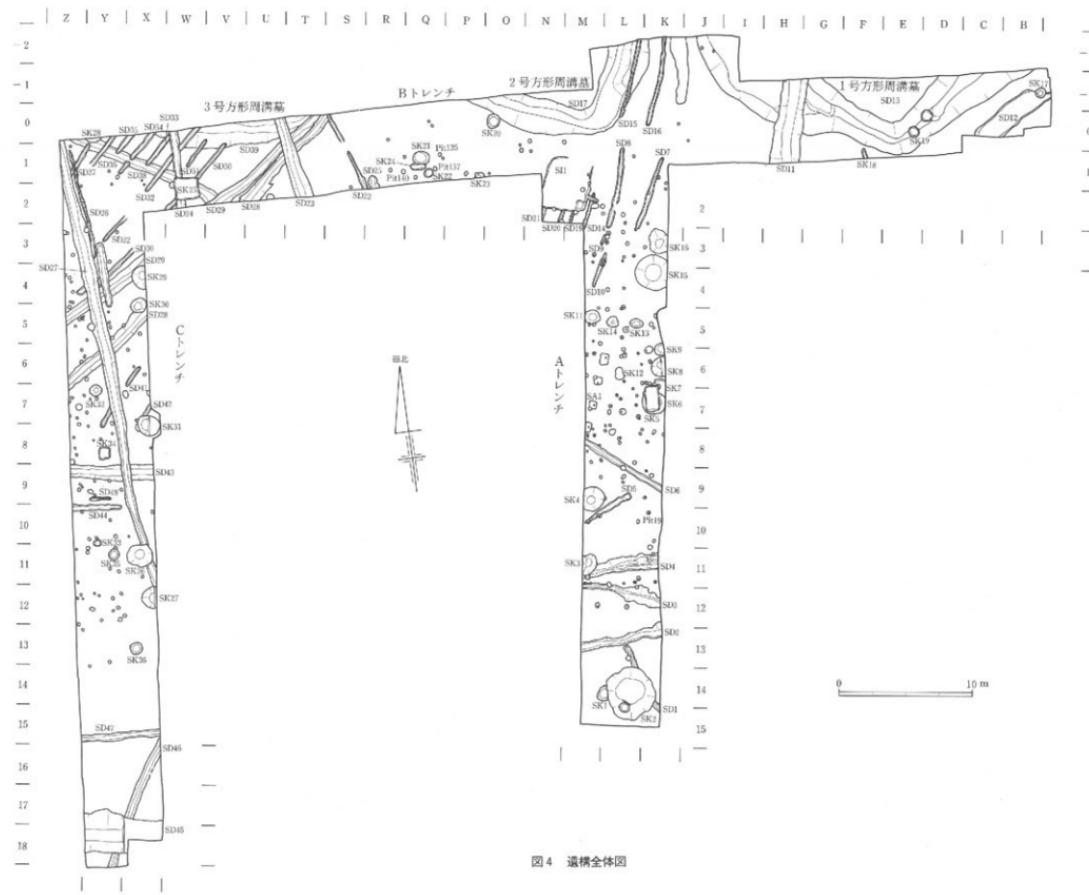
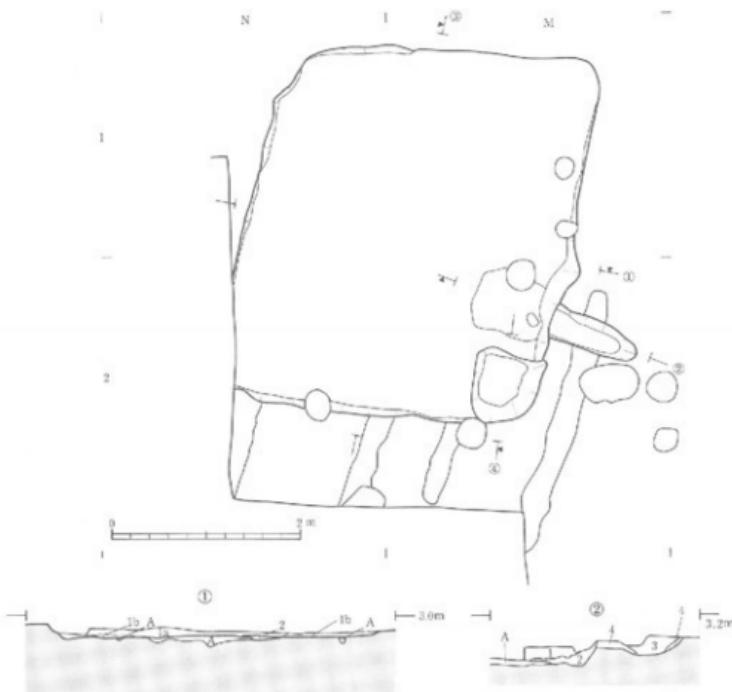


図4 遺構全体図



カマド部

番号	色名	生質	検定物及び標準
1	高褐色	10YR5/3	シルト 黄土粒を少量含む
2	黑色	10YR2/1	シルト 灰土・炭の層
3	深褐色	10YR5/2	シルト 褐土粒をまだらに含む
4	褐色	10YR4/4	砂質シルト 黒褐色土粒をまだらに含む



S11

固形	色	性質	健人部及び特徴
1a 耐熱陶	10YR5/3	粘土質セメント	白色火照り釉、吸水率高めで白色セメントを含む 吸水率高い。粗粒あり。一様土器あり。
1b 耐熱陶	10YR5/3	滑石シリコン	吸水率高い。粗粒あり。一様土器あり。
2 黑陶色	10YR2/2	シリコン質粘土	VTR暗褐色シート、灰化物をまだらに含む
A 耐熱陶	10YR5/3	滑石シリコン	吸水率高い。粗粒り方程なし。
B 耐熱陶	10YR2/2	シリコン質粘土	

貯藏穴状ビット			採入地名が勘査
番号	色調	性質	
1 海褐色	10YR4/4	砂質シルト	透光波状合せ
2 暗褐色	10YR5/2	粘土質シルト	鉄化鉱物を少含む 室面に土壌鉱物あり
3 黄褐色	10YR5/6	粘質シルト	緑色粘土質シルトを透視に含む

図5 SI1住居跡実測図

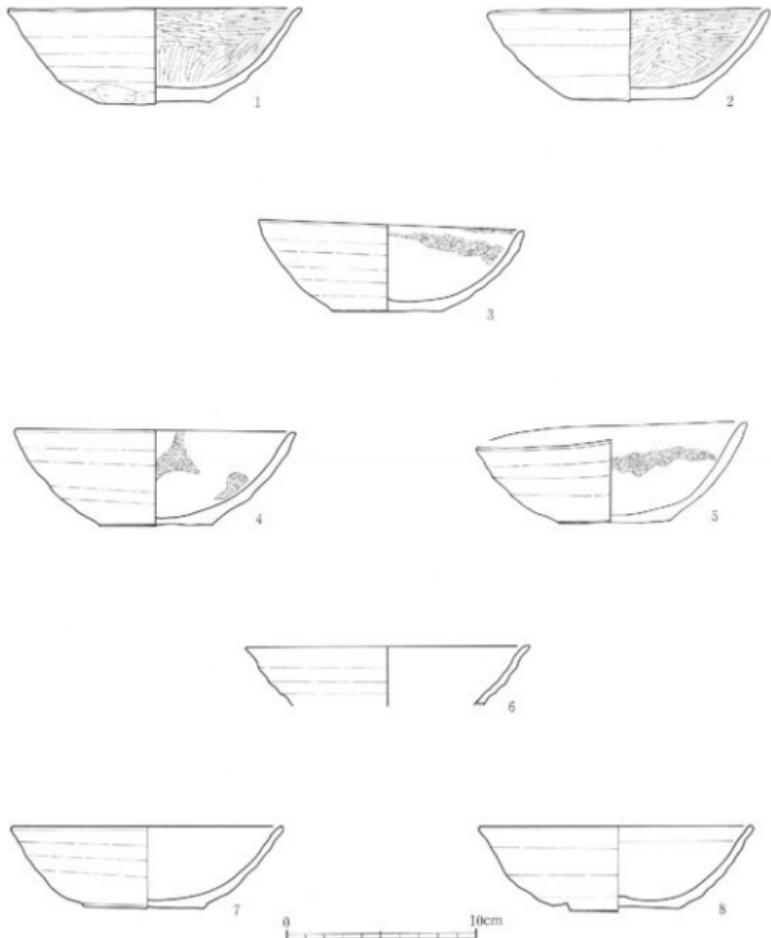


图 6 S11住居跡出土遺物

號	編號	形	狀	所	有	器	形	口	底	壁	高	寬	厚	材	性
6-1	罐	平底	大口	6-1-1	6-1-2	6-1-3	6-1-4	6-1-5	6-1-6	6-1-7	6-1-8	6-1-9	6-1-10	6-1-11	6-1-12
6-2	罐	平底	大口	6-2-1	6-2-2	6-2-3	6-2-4	6-2-5	6-2-6	6-2-7	6-2-8	6-2-9	6-2-10	6-2-11	6-2-12
6-3	罐	平底	大口	6-3-1	6-3-2	6-3-3	6-3-4	6-3-5	6-3-6	6-3-7	6-3-8	6-3-9	6-3-10	6-3-11	6-3-12
6-4	罐	平底	大口	6-4-1	6-4-2	6-4-3	6-4-4	6-4-5	6-4-6	6-4-7	6-4-8	6-4-9	6-4-10	6-4-11	6-4-12
6-5	罐	平底	大口	6-5-1	6-5-2	6-5-3	6-5-4	6-5-5	6-5-6	6-5-7	6-5-8	6-5-9	6-5-10	6-5-11	6-5-12
6-6	罐	平底	大口	6-6-1	6-6-2	6-6-3	6-6-4	6-6-5	6-6-6	6-6-7	6-6-8	6-6-9	6-6-10	6-6-11	6-6-12
6-7	罐	平底	大口	6-7-1	6-7-2	6-7-3	6-7-4	6-7-5	6-7-6	6-7-7	6-7-8	6-7-9	6-7-10	6-7-11	6-7-12
6-8	罐	平底	大口	6-8-1	6-8-2	6-8-3	6-8-4	6-8-5	6-8-6	6-8-7	6-8-8	6-8-9	6-8-10	6-8-11	6-8-12

る。南西辺軸で磁北より45度西に偏る。

〔周溝の形態・規模〕 周溝の台状部側はほぼ直線的であり、外縁部は南隅から東西隅に向かってふくらんでいる。また南隅は外縁部で少し丸みを帯びている。周溝の幅は南隅で2.5m・南東辺の東側で3.3m・南西辺の西側で4.5mを計り、南隅に向かうにつれて狭くなる。周溝の底面の幅は南隅で0.2m・南東辺の東側で1.1m・南西辺の西側で3.3mを計る。周溝の深さは南隅で0.8m・南東辺の東側で1.1m・南西辺の西側で1.0mを計る。底面は南西辺・東西辺で一段低くなる部分があるが、ほぼ平坦である。壁は角度をもって立ち上がる。断面形は逆台形である。

〔周溝内堆積土〕 周溝内堆積土は7層に大別される。にぶい黄橙色粘土・黒褐色シルト・黒褐色砂質シルト・にぶい黄橙色シルトである。上部はゆるやかなレンズ状に堆積している。下部は壁の崩壊土および台状部の崩落土である。6層で土師器が出土している。

〔台状部〕 台状部も検出部分はかぎられているが、東西軸9m以上・南北軸4m以上の方形と推定される。盛土・主体部は検出されなかった。

〔出土遺物〕 周溝の南東辺の一段低くなった地点で土師器壺の底部と体部が、南隅の地点で土師器壺の口縁部が底面近くの崩落土上より小破片となり散在して出土している。

2号方形周溝墓（SD17溝跡）

〔遺構の確認〕 BトレチのL～P-0～-2区で確認された。

〔遺構の重複〕 小溝群①（SD15）・SK20に切られている。

〔平面形・規模〕 周溝は北側の調査区外にのびているため、検出できたのは南東部分（東辺・南辺）だけで、隅が確認できるのは南東部分1ヶ所である。平面形は方形と推定されるものの、北東-南西軸で14m以上北西-南東軸で6m以上ということが判明するだけである。ただ、北側の試掘部分および1号方形周溝墓まで周溝がのびていないことよりその規模は20mを越えないといと推定される。南辺軸で磁北に対して65度西に偏る。

〔周溝の形態・規模〕 周溝の台状部側はほぼ直線的であり、外縁部は南東隅から中央部に向かってふくらんでいる。また南東隅は外縁部で少し丸みを帯びている。周溝の幅は南東隅の狭い所で1.7m・南辺の西側の広い所で2.7m・東辺の北側の広い所で3.2mを計り、南東隅に向かうにつれて狭くなる。周溝の底面の幅は南東隅で50cm・南辺の西側の広い所で70cm・東辺の北側の広い所で170cmを計る。周溝の深さは南東隅で35cm・南辺の西側で60cm・東辺の北側で60cmを計る。底面は東辺の北側で段がつく部分があるが、ほぼ平坦である。壁は外縁部はゆるやかに、台状部側は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。

〔周溝内堆積土〕 周溝内堆積土は3層に大別される。黒色シルト質粘土・黒褐色粘土・黄橙色砂質シルトからなる。ゆるやかなレンズ状に堆積している。

〔台状部〕 台状部も検出部分はかぎられているが、北東-南西軸で5.5m以上・北西-南東軸

3m以上の方形と推定される。盛土・主体部は検出されなかった。

[出土遺物] 南辺の調査区北端より土師器片が1点出土している。

3号方形周溝墓（S D39溝跡）

[遺構の確認] BトレンチのT-X-0区で確認された。

[遺構の重複] S D23・24・28・29・小溝群②（S D30～34）に切られている。

[平面形・規模] 周溝は北側の調査区外にのびているため、検出できたのは南側部分（南辺）だけである。南辺が12m以上ということが判明するだけである。周溝の形態・堆積土状況・出土遺物から方形周溝墓と判断した。平面形は1号方形周溝墓・2号方形周溝墓の検出状況より方形と推定される。南辺軸で磁北に対して85度西に偏る。

[周溝の形態・規模] 周溝の外縁部は東西隅から中央部に向かって弧を描くようにふくらんでいる。周溝の幅は中央部1.6m以上・南東隅1.0mを計る。周溝の底面の幅は50cm～60cmを計る。周溝の深さは南東隅で30cm・中央部で50cm・南西隅で70cmを計る。底面は、ほぼ平坦である。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形である。

[周溝内堆積土] 周溝内堆積土は4層に大別される。黒褐色粘土・暗褐色粘土・黒褐色砂質シルト・黄褐色砂質シルトからなる。ゆるやかなレンズ状に堆積している。

[台状部] 台状部も検出部分は南東隅にかぎられているためその形状は不明である。

[出土遺物] 周溝の埋土4a層より土師器坏の完形品が出土している。

3. 溝跡

S D 1溝跡

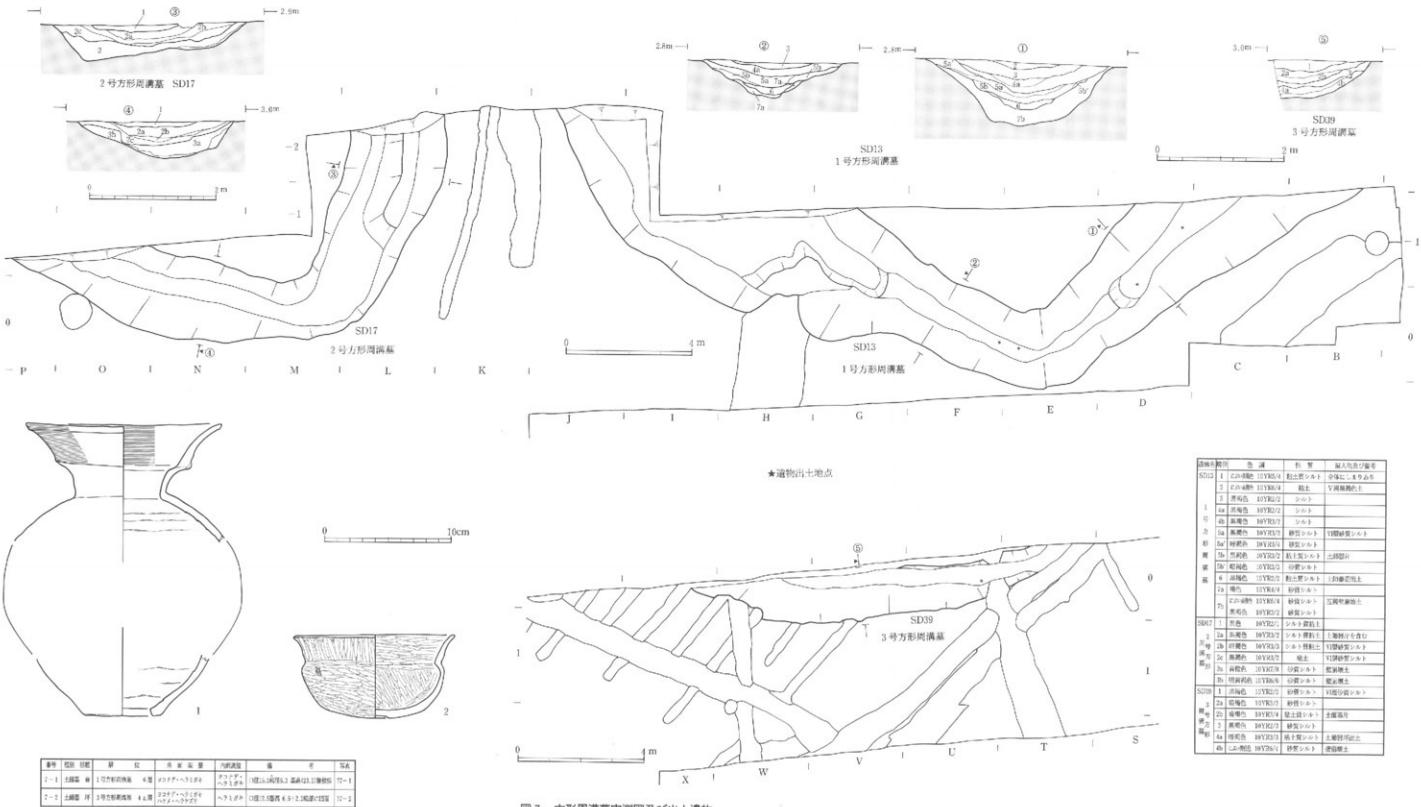
AトレンチのL-13からK-14にかけて検出された。調査区を北西-南東に斜めに延びている。SK-2に切られている。上幅35cm～40cm・底面幅5cm～10cm・深さ15cm～20cmを計る。底面には若干の凹凸があり、北西から南東へ向かって徐々に低下している。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は偏平なU字形である。堆積土は、黒褐色シルトの単層である。土師器片が1点出土している。磁北に対して12度西に偏る。

S D 2溝跡

AトレンチのK-13からM-13にかけて検出された。調査区を東-西に直行するように延びている。上幅50cm～80cm・底面幅10cm～20cm・深さ10cm～20cmを計る。底面には若干の凹凸があり、東から西へ向かって徐々に低下している。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色シルトの単層である。須恵器の鉢の口縁部が1点出土している。磁北に対して85度東に偏る。

S D 3溝跡

AトレンチのK-11からM-11にかけて検出された。調査区を東-西に直行するように延



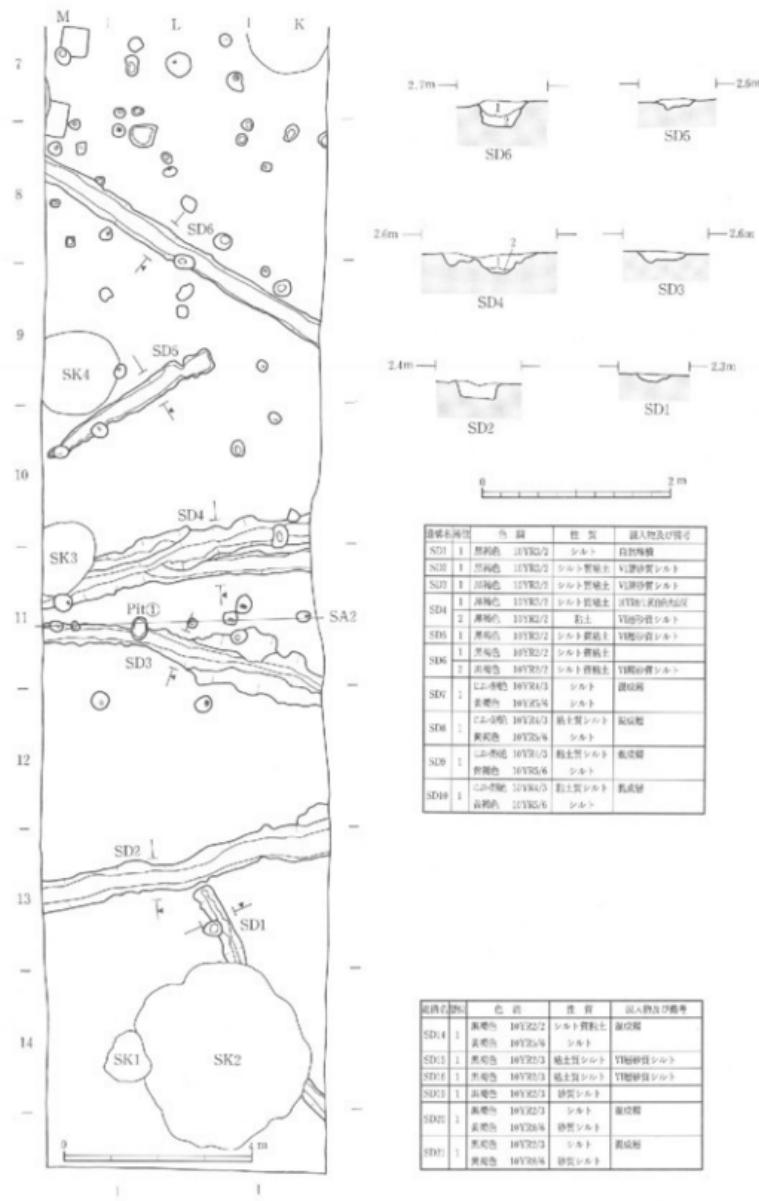


図 8 A ドレンチ溝跡群

びている。S A 2に切られている。上幅は40cm～140cmで東側で広がる。底面幅10cm～20cm・深さ10cm～20cmを計る。底面には、若干の凹凸がある。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色シルト質粘土の単層である。土師器坏の破片が2点出土している。磁北に対して70度西に偏る。

S D 4溝跡

AトレチのK-11からM-11にかけて検出された。調査区を東～西に直行するように延びている。S K 3に切られている。上幅80cm～120cm・底面幅15cm～30cm・深さ10cm～25cmを計る。底面には著しい凹凸がある。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がり、壁上部の東部では南側・西部では北側に深さ5cm程度の溝状の落ち込みがある。断面形は逆台形である。堆積土は、灰白色火山灰を含んでいる黒褐色シルト質粘土である。須恵器坏の口縁部が1点、体部の破片が1点出土している。磁北に対して80度東に偏る。

S D 5溝跡

AトレチのL-9からM-10にかけて検出された。調査区を北東～南西に斜めに延びている。ピットに切られている。上幅は25cm～45cm・底面幅20cm～30cm・深さ5cm～10cmを計る。底面には、若干の凹凸がある。壁は角度をもってゆるやかに立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は、黒褐色シルト質粘土の単層である。須恵器片が1点出土している。磁北に対して65度東に偏る。

S D 6溝跡

AトレチのK-9からM-8にかけて検出された。調査区を北西～南東に斜めに延びている。ピットに切られている。上幅45cm～55cm・底面幅25cm～30cm・深さ15cm～20cmを計る。底面は平坦で、北西から南東へ向かって徐々に低下している。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は2層で、黒褐色シルト質粘土を基調として下層に基本層のVII層を含む。土師器片が1点出土している。磁北に対して50度西に偏る。

S D 11溝跡

BトレチのH-1からII-1にかけて検出された。調査区を北～南に直行するように延びている。1号方形周溝基を切っている。上幅1.8m～2.2m・底面幅75cm～80cm・深さ70cm～80cmを計る。底面は平坦である。壁は角度をもって立ち上がり、上部はゆるやかになる。断面形は逆台形である。堆積土は4層で、灰黄褐色・黒褐色・オリーブ黒色のシルト質粘土・黄褐色の砂である。底面に砂の層があり水が流れていることが窺える。近世の陶器が1点・礫石器が1点・土師器片が1点出土している。磁北に対して12度東に偏る。

S D 12溝跡

BトレチのA-1からC-0にかけて検出された。調査区を北東～南西に斜めに延びてい

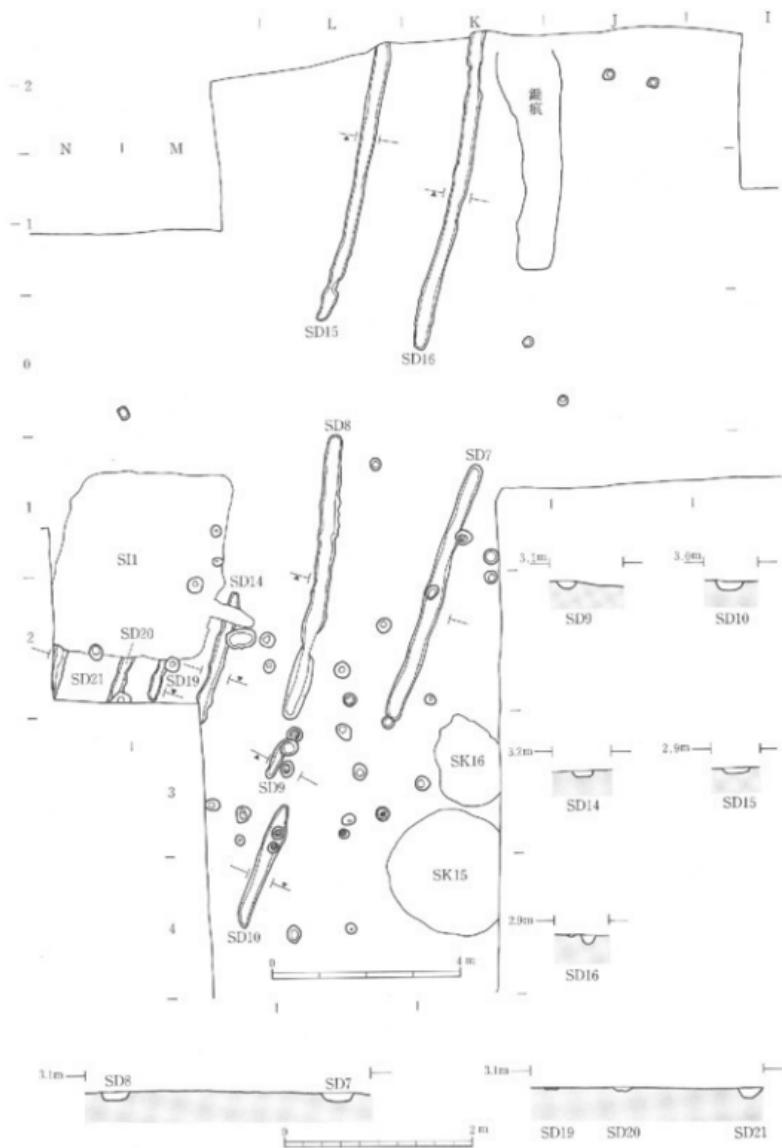


図9 小溝群①

る。SK17に切られている。上幅1.5m～1.6m・底面幅85cm～95cm・深さ5cm～20cmを計る。底面には、若干の凹凸がある。壁は北側でゆるやかに南側で角度をもってまっすぐ立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は、黒褐色シルト質粘土の単層である。出土遺物はない。磁北に対して58度東に偏る。

S D 18溝跡

BトレンチのF-1で検出された。調査区を北一南に延びている。上幅35cm・底面幅20cm・深さ5cmを計る。底面には、若干の凹凸がある。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色粘土質シルトの単層である。出土遺物はない。磁北に対して7度東に偏る。

S D 22溝跡

BトレンチのS-0からS-1にかけて検出された。調査区を北西一南東に斜めに延びている。SD28を切っている。上幅30cm～40cm・底面幅15cm～20cm・深さ5cm～15cmを計る。底面には、若干の凹凸がある。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は2層で、黒褐色粘土を基調としており下層に黄橙色の砂を含む。出土遺物はない。磁北に対して20度西に偏る。

S D 23溝跡

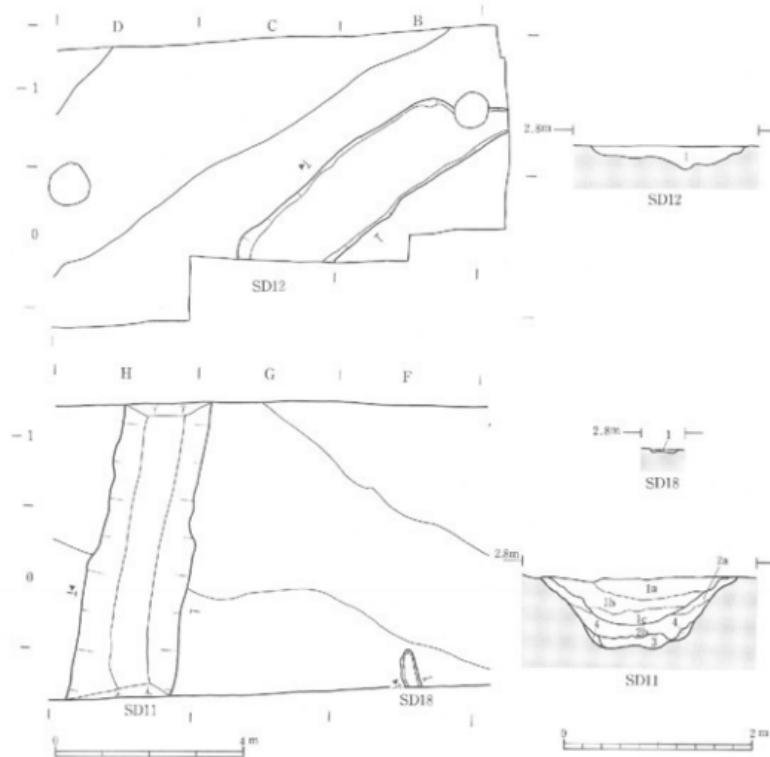
AトレンチのU-OからT-2にかけて検出された。調査区を北西一南東に斜めに延びている。SD28・29・3号方形周溝墓を切っている。上幅は75cm～130cmで北西から南東に向かって広がる。底面幅50cm・深さ30cm～40cmを計る。底面はゆるやかに窪み、北西から南東へ向かって徐々に低下している。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がり、東側の上部にテラス状の段がある。断面形は逆台形である。堆積土は、3層で黒褐色粘土を基調に黄橙色の砂質シルトを含む。底面に荒砂の集積があり水が流れていたことが窺える。土師器片が4点出土、内1点は壊れた体部である。磁北に対して10度西に偏る。

S D 24溝跡

BトレンチのW-0からW-2にかけて検出された。調査区を北一南に直行するように延びている。SK25に切られて、小溝群②(SD30・32・33)・3号方形周溝墓を切っている。上幅60cm～70cm・底面幅25cm～40cm・深さは20cm～30cmを計る。底面には著しい凹凸があり、北西から南東へ向かって徐々に低下している。壁は角度をもってゆるやかに立ち上がる。断面形は、偏平なU字形を呈している。堆積土は、1層で黒褐色シルトである。土師器片が1点出土している。磁北に対して2度東に偏る。

S D 25溝跡

BトレンチのR-1で検出された。上幅70cm・底面幅25cm・深さ10cmを計る。底面には、若



地層名	色調	性質	流入色及び参考
SD11	1 深褐色 15YR6/2	粘土質シルト	灰成層
2a	暗赤褐色 15YR6/4	砂質シルト	鉄成層・マンガン取
2b	暗褐色 15YR6/2	シルト	ブリッカ法に達成
3	灰褐色 15YR5/7	粘土質シルト	鉄成層
4a	暗褐色 15YR6/8	砂質シルト	ニコ・鉄成層シルト
4b	暗褐色 15YR6/2	シルト	鈷成層・マンガン取
5c	暗褐色 15YR4/2	シルト	高褐色シルト
2c	灰褐色 15YR6/2	粘土質シルト	鉄成層
2d	暗褐色 15YR6/2	粘土質シルト	V1鉄成層シルト
3	オーブ・グリーン 5YR3/1	粘土質シルト	オーブ・グリーン
4	黄褐色 2.5Y5/4	砂	灰成層泥炭土
5c	暗褐色 15YR4/2	シルト	鉄成層泥炭土
SD12	1 暗褐色 15YR6/2	粘土	灰成層
2	暗褐色 15YR6/2	シルト	EC成層・豊島
SD18	1 暗褐色 15YR6/2	粘土質シルト	V1鉄成層シルト
2	暗褐色 15YR6/2	シルト	豊島に門型

地層名	色調	性質	流入色及び参考
SD12	1 深褐色 15YR5/2	粘土	V1鉄成層シルト
2	暗褐色 15YR5/2	粘土	灰成層
SD18	1 暗褐色 15YR6/8	シルト	シルト
2	暗褐色 15YR6/2	シルト	シルト
SD11	1 暗褐色 15YR5/2	粘土	V1鉄成層シルト
2	暗褐色 15YR5/2	シルト	シルト
3	暗褐色 15YR5/2	シルト	シルト
4	暗褐色 15YR5/2	シルト	シルト
5	暗褐色 15YR5/2	シルト	シルト
6	暗褐色 15YR5/2	シルト	シルト
7	暗褐色 15YR5/2	シルト	シルト
SD05	1 暗褐色 15YR6/2	シルト質粘土	灰成層
2	暗褐色 15YR6/2	シルト質粘土	灰成層
SD06	1 暗褐色 15YR6/2	シルト質粘土	灰成層
2	暗褐色 15YR6/2	シルト質粘土	粘土・灰成層

図10 Bトレンチ東側溝跡

干の凹凸がある。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は皿形である。堆積土は、黄橙色砂質シルトと炭化物・焼土を含む黒褐色シルト質粘土である。出土遺物はない。磁北に対して20度西に偏る。

S D26溝跡

BトレンチのZ-1からY-3にかけて検出された。調査区を北西-南東に斜めに延びている。S D27に切られ、小溝群②(S D37)を切っている。上幅20cm~25cm・底面幅10cm~15cm・深さ5cm~20cmを計る。底面には若干の凹凸があり、北西から南東へ向かって徐々に低下している。壁は角度をもって立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は2層で、黄橙色のシルトを含む暗褐色シルトである。出土遺物はない。磁北に対して8度西に偏る。

S D27溝跡

B・CトレンチのZ-0からX-11にかけて検出された。調査区を北西-南東に斜めに延びている。SK26・27・SB3に切られて、SD28・29・43・小溝群②(S D37)・小溝群③(S D41)を切っている。上幅は50cm~120cmで、北西から南東に向けて徐々に細くなっている。底面幅25cm~65cm・深さ25cm~70cmを計る。底面には著しい凹凸があり、中央に10cmくらいの筋状の高まりがある所もある。北西から南東へ向かって徐々に低下して3ラインの辺りで一段高くなっている。X-4区の北西部で50×150cmの規模で深さ15cmの土坑状の落ち込みがみられる。壁は角度をもって立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は4層で、黒褐色シルト質粘土を基調に黄橙色砂質シルト及び炭化物を含む。土師器片・須恵器・中世陶器・砥石が出土している。磁北に対して10度西に偏る。

S D28溝跡

BトレンチのT-0からU-2・CトレンチのX-5からZ-7にかけて検出された。調査区を北東-南西に斜めに延びている。SK27・SD23・27・SA3に切られて、SD29・3号方形周溝墓を切っている。上幅80cm~100cm・底面幅30cm~40cm・深さ30cm~50cmを計る。底面には若干の凹凸があり、北東から南西へ向かって徐々に低下している。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がり東側の上部でテラス状の段を有す。断面形は逆台形である。堆積土は3層で、暗褐色シルト質粘土を基調に黄橙色砂質シルトを含む。土師器片が2点出土している。磁北に対して50度東に偏る。

S D29溝跡

BトレンチのT-0からV-2・CトレンチのX-3からZ-5にかけて検出された。調査区を北東-南西に斜めに延びている。SK29・SD23・27・28・40に切られて、SD38・3号方形周溝墓を切っている。上幅80cm~110cm・底面幅30cm~40cm・深さ45cm~65cmを計る。底面には若干の凹凸があり中央が窪み、北東から南西へ向かって徐々に低下している。壁は角度

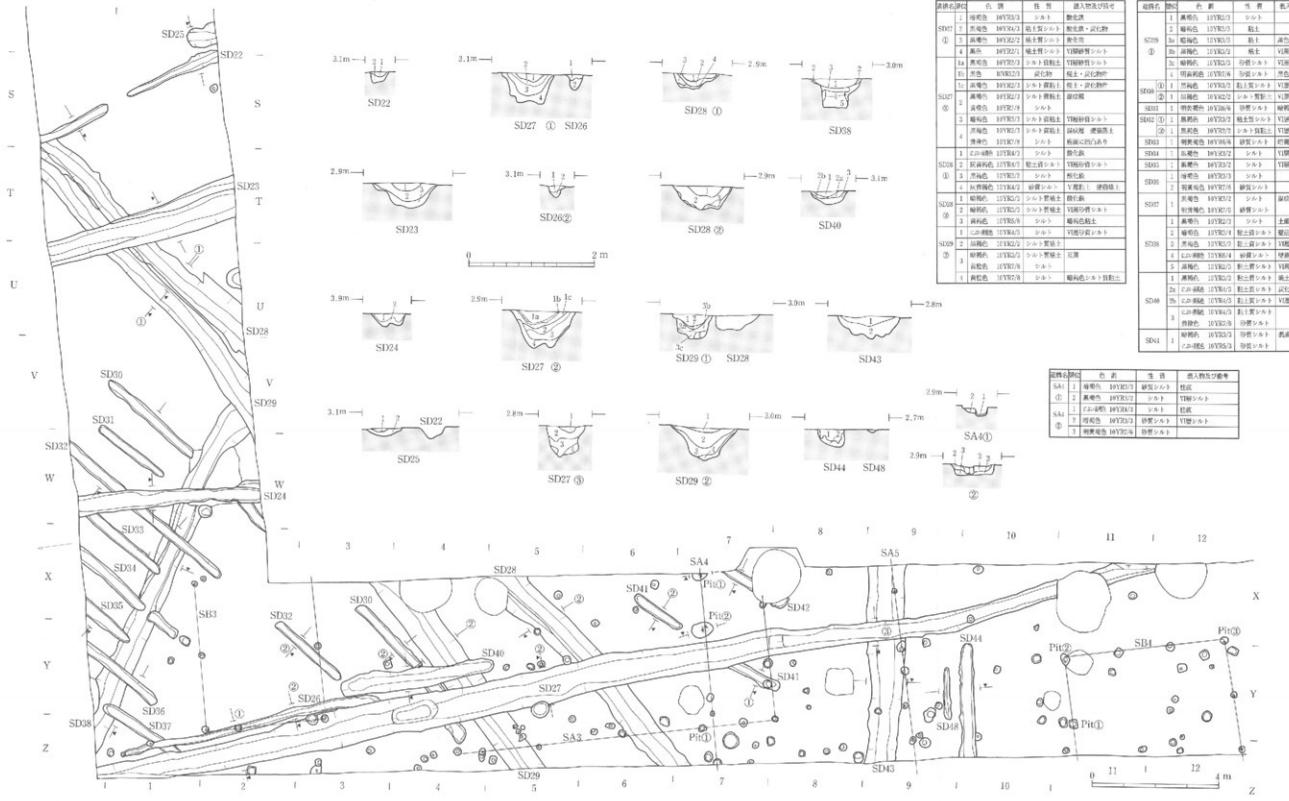


図11 B トレンチ・C トレンチ溝跡群

をもってまっすぐ立ち上がり中ほどで外反する。断面形は逆台形である。堆積土は3層で、黒褐色シルト質粘土を基調に黄橙色砂質シルトを含む。上師器片が2点出土している。磁北に対して57度東に偏る。

S D38溝跡

B・CトレントのZ-1からV-2にかけて検出された。調査区を北西-南東に斜めに延びている。SK25・28・SD24・小溝群②(SD30・31・32・33・34・36・37)に切られている。上幅80cm~110cm・底面幅30cm~35cm・深さ45cm~50cmを計る。底面は平坦であり、底面高はほぼ一定である。壁は急角度に立上がり中位からゆるやかに広がる。断面形は逆台形である。堆積土は5層で黒褐色粘土質シルトとぶい黄橙色砂質シルトである。出土遺物はない。磁北に対して60度西に偏る。

S D40溝跡

CトレントのY-3からY-5にかけて検出された。調査区を北-南に延びている。SD29・小溝群②(SD30)を切っている。上幅45cm~70cm・底面幅20cm~35cm・深さ10cm~20cmを計る。底面はゆるやかに窪み、壁は角度をもってゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は3層で黒褐色粘土質シルトとぶい黄褐色粘土質シルトがある。出土遺物はない。磁北に対して10度西に偏る。

S D43溝跡

CトレントのX-9からZ-9にかけて検出された。東-西に調査区を直行するように延びる。SD27・SA5に切られている。上幅90cm~115cm・底面幅35cm~50cm・深さ30cm~45cmを計る。底面は著しい凹凸があり、底面高はほぼ一定である。壁は角度をもってゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は2層で、暗褐色シルトである。灰白色火山灰を含む。土師器片が1点出土している。磁北に対して82度西に偏る。

S D44溝跡

CトレントのY-10からZ-10にかけて検出された。東-西に調査区を直行するように延びている。上幅35cm~55cm・底面幅30cm・深さ25cm~30cmを計る。底面は北側に傾いており、レベルはほぼ一定である。壁は急角度で立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は2層で、黒褐色粘土質シルトと黄橙色砂質シルトである。出土遺物はない。磁北に対して82度西に偏る。

S D45溝跡

CトレントのX-18からY-18にかけて検出された。東-西に調査区を直行するように延びている。SD46を切っている。上幅は2.8m~3.3m・底面幅80cm~100cm・深さ80cmを計る。底面は、ほぼ平坦である。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は大別4層で、ぶい黄褐色・黒褐色・暗褐色・灰黃褐色・オリーブ黒色のシルト・暗緑

灰色の砂である。底面に砂の集積があり水が流れていたことが窺える。青磁1点・木製品・石製品・動物遺存体(貝)・植物遺存体が出土している。磁北に対して82度西に偏る。

S D46溝跡

CトレンチのX-16からY-18にかけて検出された。調査区を北東-南西に斜めに延びている。S D45に切られ、S D47を切っている。上幅60cm~70cm・底面幅20cm・深さ30cm~40cmを計る。底面はゆるやかに丸く窪み、底面高はほぼ一定である。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は4層で、黒褐色・暗褐色のシルト質粘土である。出土遺物はない。磁北に対して30度東に偏る。

S D47溝跡

CトレンチのX-15からY-15にかけて検出された。東-西に調査区を直行するように伸びている。S D46に切られている。上幅40cm~60cm・底面幅20cm~35cm・深さ15cm~20cmを計る。底面はほぼ平坦で、底面高はほぼ一定である。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は1層で、暗褐色シルト質粘土である。出土遺物はない。磁北に対してほぼ直交する。

S D48溝跡

CトレンチのY-9で検出された。東-西に延びている。上幅20cm~25cm・底面幅5cm~10cm・深さ5cm~10cmを計る。底面には、若干の凹凸がある。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は1層で、黒褐色シルトである。出土遺物はない。磁北に対して82度西に偏る。

小溝群① (S D 7・8・9・10・14・15・16・19・20・21)

BトレンチのK~N--2~4区にかけて検出された。調査区を1m~4mの間隔で北北東-南南西にほぼ平行に走る小溝群である。S I 1に切られ、2号方形周溝茎を切っている。上幅20cm~35cm・底面幅15cm~25cm・深さ1cm~20cmを計り、溝ごとに多少のばらつきがある。底面には、著しい凹凸がある。特にS D16は、半円状の窪みが二列に並んでいる。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層でVI層土のブロックを含む。S D15・16とS D17・18は位置的にずれており、その間に一つの区画があることが推定される。S D21より土肺器片が1点出土している。磁北に対して20~25度東に偏る。

小溝群② (S D 30・31・32・33・34・35・36・37)

B・CトレンチのV~Z-1~4区にかけて検出された。調査区を75cm~90cmの間隔で北東-南西にほぼ平行に走る小溝群である。S K15・28・S D24・26・27・30に切られ、S D38・3号方形周溝茎を切っている。上幅30cm~40cm・底面幅15cm~30cm・深さ5cm~20cmと溝ごとに

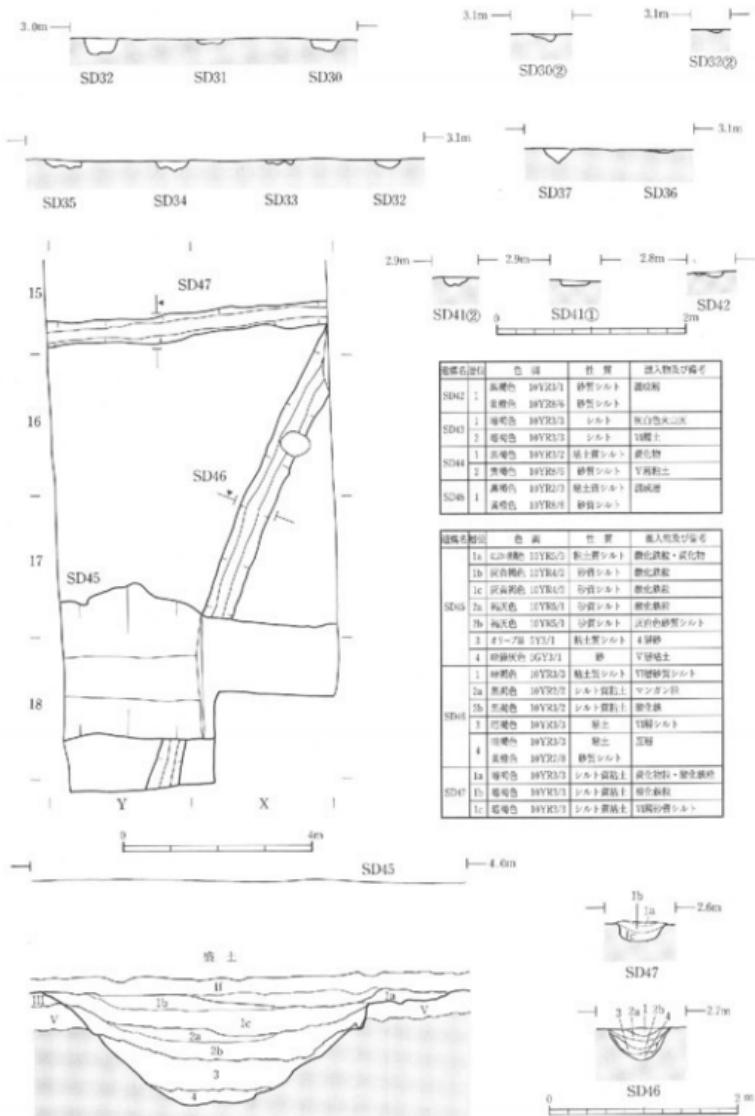


図12 Cトレンチ南側溝跡

多少のばらつきがある。底面には、著しい凹凸がある。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色粘土質シルトが主でVI層土のブロックを含む単層である。SD34より土師器片が1点出土している。磁北に対して45~48度東に偏る。

小溝群③ (SD41・42)

CトレントのX~Y-6~8区にかけて検出された。調査区を2mの間隔で北東~南西にはほぼ平行に走る小溝群である。SK31・SD27に切られている。上幅30cm・底面幅20cm~25cm・深さ5cm~10cmを計る。底面には、著しい凹凸がある。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、VI層の土のブロックを含む。出土遺物はない。磁北に対して37度東に偏る。

鑿痕跡

小溝群①と平行して鋤の跡と思われる半円状の窪みが連なる。小溝群①と一連のものと思われる。

4. 土坑・井戸跡

SK1井戸跡

L-14区で検出されている。SK2に切られている。平面形はほぼ円形で、長軸1.1m・短軸1m・深さ2.1mを計る。底面は径65cmの不整円形を呈し、中央部に径40cmで深さ10cmの窪みがみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面は円筒形である。堆積土は、上位では黒褐色のシルト質粘土・中位では粘性のやや強い土・下位ではグライ化した粘土である。堆積土の状況より人為堆積とみられる。堆積土より中世陶器・磨面のある石製品・礫・把手・曲物の底板・木片が出土している。

SK2井戸跡

K・L-14・15区で検出されている。SD1・SK1を切っている。平面形は長軸4.0m・短軸3.5mの不整形の楕円形である。深さ2.4mまで確認し底面まで検出してないが掘り込み部分は長軸2.3m・短軸1.7mの楕円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち中位でゆるやかになる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色・暗灰黄色のシルト・暗オリーブ灰色の砂・オリーブ黒色の粘土質シルトである。堆積土全体に礫を含み一度に埋め戻されたことが窺える。南壁面中位に平面形が長軸80cm・短軸65cmの楕円形で深さが確認面より2.6mの掘り込み部分がある。底面は径80cmの不整形の円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ちオーバーハングしているところもある。断面形は円筒形である。堆積土中から陶器・磁器・瓦・加工面をもつ礫・棒状銅製品・木製の蓋?・獸骨・貝が出土している。また、半円を抉った長方形の板材が二つの掘り込みを仕切るように出土している。

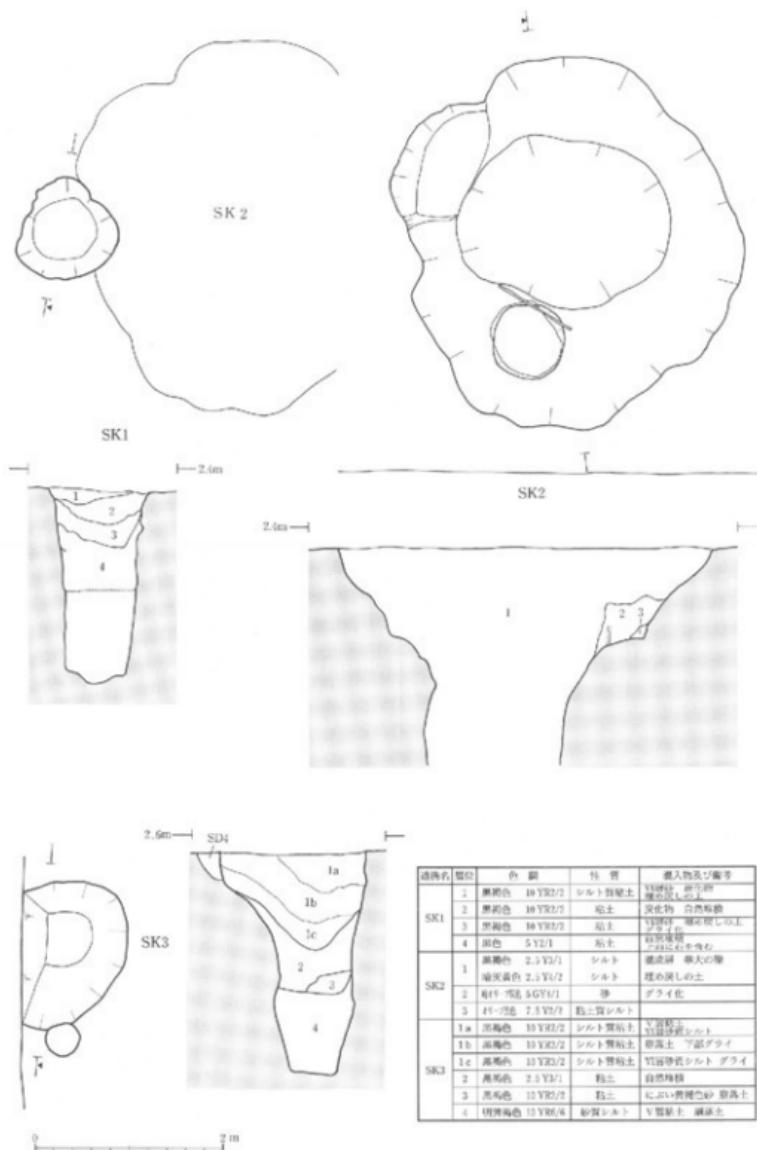


図13 土坑1

S K 3 井戸跡

M-11区で検出されている。S D 4を切っている。西側が調査区外のため東半部の検出である。平面形は南北軸で径1.6mの不整形の円形と推定される。深さは2.3mである。底面は径50cmの不整円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位で南側はゆるやかな傾斜になる。断面形は漏斗形である。堆積土は上位が黒褐色シルト質粘土で、中位が粘性のやや強い土になり、下位では明黄褐色の砂質シルトになる。堆積土より杭が出土している。

S K 4 井戸跡

M-9区で検出されている。西側の一部は調査区外に延びる。平面形は径1.75mの不整形の円形と推定される。深さは2.65mである。底面は径60cmの円形を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位から徐々にゆるやかに広がる。断面形は漏斗形である。堆積土は、上位では黒褐色シルト質粘土・中位ではにぶい黄褐色の砂・下位ではグライ化した暗オリーブ灰の砂を含む粘土である。堆積土の状況から上部は人為堆積とみられる。堆積土中から陶器・瓦質土器・鎌・木片が出土している。

S K 5 土坑

K-7区で検出されている。S K 6・7を切っている。平面形は長軸1.9m・短軸1mの長方形を呈する。深さは20~30cmである。底面は径65cmの不整円形を呈し、中央部に径40cmで深さ10cmのビットがみられる。底面には、若干の凹凸がある。壁は東側ではほぼ垂直に、西側でゆるやかに立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は、黒褐色粘土を含むにぶい黄橙色砂である。底面から礫が出土している。

S K 6 井戸跡

K-7区で検出されている。S K 7を切って、S K 5に切られている。東側の一部は調査区外に延びる。平面形は径1.75mの不整円形で、深さは1.3mである。底面は径1.15mの不整円形を呈している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は円筒形である。堆積土は、上位ではにぶい黄褐色の砂・中位では黒褐色粘土・下位では黑色粘土である。レンズ状に堆積しているが上部は人為堆積である。堆積土中から土器・陶器・木片・薬材・種子が出土している。

S K 7 土坑

K-6区で検出されている。S K 5・6に切られている。平面形は不整な方形の遺構と考えられるが不明である。深さは15cmである。底面は著しい凹凸がある。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は歪な逆台形である。堆積土は、にぶい黄橙色を含む黒褐色シルト質粘土である。出土遺物はない。

S K 8 井戸跡

L-6区で検出されている。東側が調査区外にのびるため西半部の検出である。平面形は径

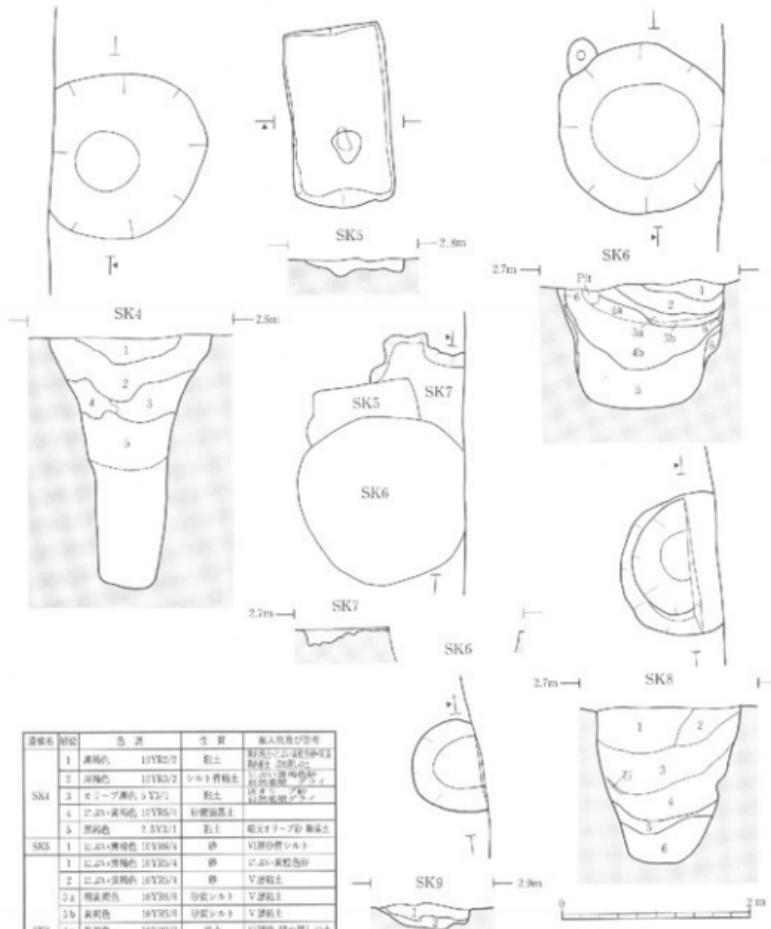


図14 土坑II

1.5mの円形と推定される。深さは1.65mである。底面は径50cmの不整円形と推定される。壁は、急角度で立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は、上位ではにぶい黄橙色のシルト質粘土・中位では灰白色火山灰を含む黒褐色粘土・下位では明黄褐色・にぶい黄橙色の砂質シルトである。灰白色火山灰を含む黒褐色粘土の層より鹿角製品が出土している。

S K 9 土坑

L-6区で検出されている。東側が調査区外にのびるため西半部の検出である。平面形は径1mの不整円形と推定される。深さは30cmである。底面は径55cmの不整円形と推定される。壁は、急角度で立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、暗褐色砂質シルトとにぶい黄橙色砂である。堆積土中から礫が出土している。

S K 11 井戸跡

M-5区で検出されている。ピットに切られている。西側の一部が調査区外に延びる。平面形は長軸で1.25m以上・短軸で1.1mの楕円形と推定される。深さは90cmである。底面は長軸60cm・短軸50cmの楕円形を呈し、中央部に径40cmで深さ10cmの窪みがみられる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は円筒形である。堆積土は、上位では黒褐色のシルト質粘土・中位では粘性の強い土・下位ではにぶい黄橙色シルト質砂である。堆積土中から中世陶器・礫が出土している。

S K 12 土坑

L-6区で検出されている。ピットを切っている。平面形は長軸90cm・短軸60cmの不整形の長方形で、深さは10cmである。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は、黒褐色の粘土を含むにぶい黄橙色のシルト質粘土である。堆積土中から土師器片が出土している。

S K 13 土坑

L-5区で検出されている。平面形は長軸110cm・短軸65cmの楕円形で、深さは15cmである。底面は緩やかに窪み、壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は皿形である。堆積土は、VII層砂を含む灰黄褐色・黒褐色の粘土である。堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から土師質土器・陶器・礫が出土している。

S K 14 土坑

L-5区で検出されている。平面形は径85cm不整形の円形で、深さは70cmである。底面は径20cmの円形呈し平坦である。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、にぶい黄橙色・にぶい黄褐色の砂質シルトである。堆積土の状況から人為堆積とみられる。出土遺物はない。

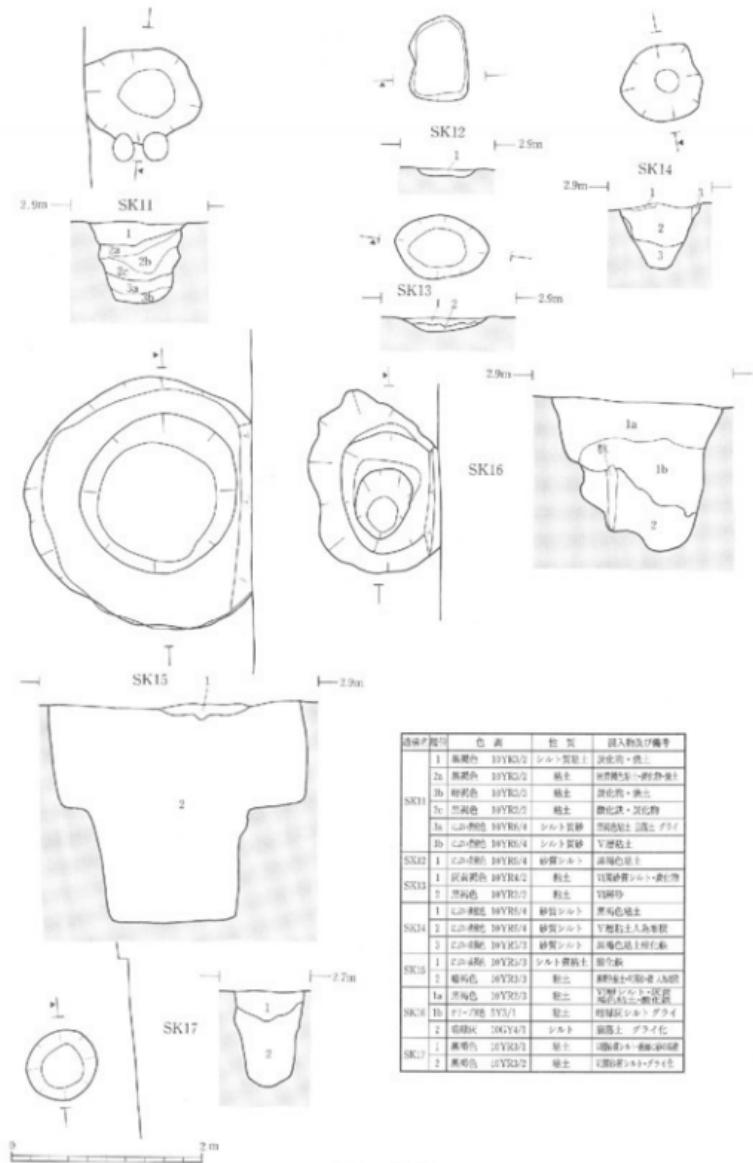


図15 土坑III

S K 15井戸跡

K-3・4区で検出されている。東側の一部が調査区外にのびるため全体の形態は判明しないが、平面形は径2.7mの円形と推定される。深さは2.3mである。底面は径1.2mの円形を呈している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、中位で段がつく。断面形は漏斗形である。堆積土は、VI層砂・黒色粘土を含む暗褐色粘土である。全体に小礫を含み一度に埋め戻された土である。堆積土中から磁器・陶器・瓦・古銭・鎌・木製品（木錐・接手など）・竹製品（編み具）・木片・穂子・貝が出土している。また、井戸の中央に節の抜けた竹が堆積土にささるように出土している。

S K 16井戸跡

K-3区で検出されている。東側の一部が調査区外にのびるため全体の形態は判明しないが、平面形は長軸2m・短軸1.3m以上の不整形の楕円形と推定される。深さは1.65mである。底面は長軸75cm・短軸60cmの不整形の楕円形を呈し、ゆるやかに窪んでいる。壁は南側ではほぼ垂直に、北側で段を有しながら立ち上がる。断面形は直なU字形である。底面近くに土留めに使用したと考えられる河原石と杭が打ち込まれている。堆積土は、VI層シルトを含む黒褐色粘土・グライ化した暗緑灰色のシルトである。堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土より礫が出土している。

S K 17井戸跡

B-1区で検出されている。SD12を切っている。平面形は径75cmの円形で、深さは1mである。底面は径45cmの円形を呈しゆるやかに窪み、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は、VI層シルトを含む黒褐色粘土からなる。出土遺物はない。

S K 18土坑

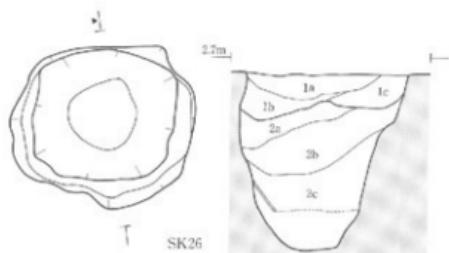
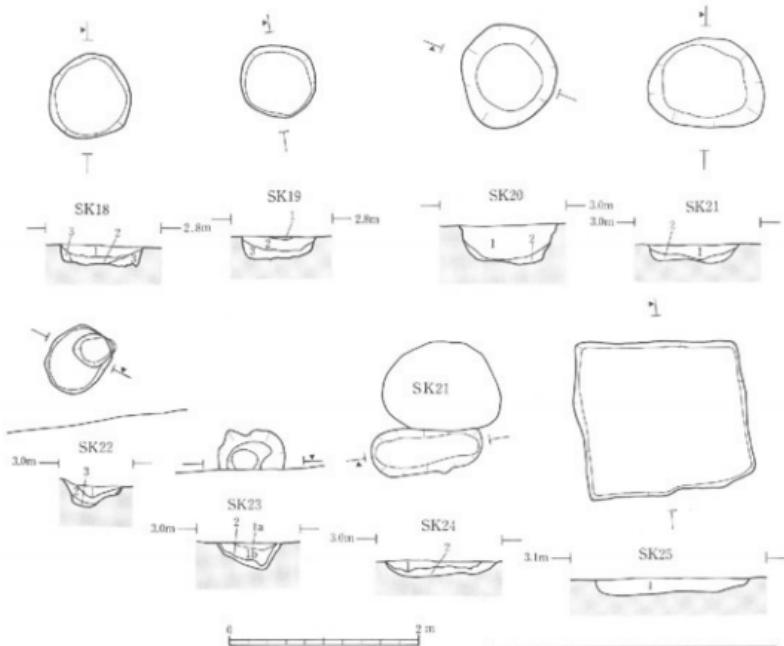
D-0区で検出されている。1号方形周溝墓を切っている。平面形は径85cmの円形で、深さは20cmである。底面は径80cmの円形を呈しほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色シルト質粘土・褐灰色粘土・黒褐色粘土からなる。出土遺物はない。

S K 19土坑

E-0区で検出されている。1号方形周溝墓を切っている。平面形は径75cmで、深さは25cmである。底面は径70cmの円形をほぼ平坦で呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、炭化物・焼土を含む黒褐色粘土・にぶい黄褐色シルトからなる。白磁が出土している。

S K 20土坑

O-0区で検出されている。2号方形周溝墓を切っている。平面形は長軸1.1m・短軸1mの



遺構名	色調	性質	流入孔及び壁厚
1	灰黒褐色	16Y3/2/7	埴土質シルト
2a	こかげ色	16Y3/2/3	埴土質シルト 埴土質粘土
2b	黒褐色	16Y3/2/2	砂質シルト
2c	黒褐色	16Y3/2/2	砂質シルト
3a	黒褐色	16Y3/2/2	埴土
3b	黒褐色	16Y3/2/7	埴土
4	灰褐色	16Y3/2/7	砂質シルト
5	灰褐色	5Y3/1/	シルト

遺構名	色調	性質	流入孔及び壁厚
SK18	1 黒褐色	16Y3/2/7	シルト質粘土 流入孔質シルト
SK19	2 黒褐色	16Y3/2/7	粘土 流入孔質シルト
SK20	1 黒褐色	16Y3/2/7	3.0m 3.0m
SK21	2 黒褐色	16Y3/2/7	3.0m 3.0m
SK22	3 黒褐色	16Y3/2/7	3.0m 3.0m
SK23	2 黒褐色	16Y3/2/7	3.0m 3.0m
SK24	3 黒褐色	16Y3/2/7	3.1m 3.1m
SK25	1 黑褐色	16Y3/2/7	3.1m 3.1m
SK26	1 黒褐色	16Y3/2/7	2.7m 2.7m
SK27	1a 黒褐色 1b 黒褐色 2a 黒褐色 2b 黒褐色 2c 黒褐色	16Y3/2/7 16Y3/2/7 16Y3/2/7 16Y3/2/7 16Y3/2/7	シルト 粘土 砂質シルト 砂質シルト 砂質シルト
SK28	1 黒褐色	16Y3/2/7	粘土 流入孔質シルト
SK29	2 黒褐色	16Y3/2/7	シルト質粘土 流入孔質シルト
SK30	1 黑褐色	16Y3/2/7	粘土 流入孔質シルト
SK31	2 黑褐色	16Y3/2/7	粘土 流入孔質シルト
SK32	1 黑褐色	16Y3/2/7	粘土 流入孔質シルト 流入孔質シルト
SK33	2 黑褐色	16Y3/2/7	粘土 流入孔質シルト 流入孔質シルト
SK34	1 黑褐色	16Y3/2/7	粘土 流入孔質シルト
SK35	2 黑褐色	16Y3/2/7	シルト質粘土 流入孔質シルト
SK36	1 黑褐色	16Y3/2/7	シルト質粘土 流入孔質シルト
SK37	1a 黑褐色	7.5TR3/7	砂質シルト 砂質粘土
1b	黑褐色	7.5TR3/7	砂質シルト 砂質粘土
1c	黑褐色	7.5TR3/7	砂質シルト 砂質粘土
SK38	2a 黑褐色	16Y3/2/7	粘土質シルト 流入孔質シルト
2b 黑褐色	16Y3/2/7	粘土質シルト グリナ化	
2c 黑褐色	16Y3/2/7	砂質シルト グリナ化	

図16 土坑IV

楕円形で、深さは40cmである。底面は径70cmの不整形を呈しやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、VI層シルトを含む黒褐色粘土である。堆積土中から土師器・須恵器が出土している。

S K 21土坑

Q-1区で検出されている。S K21を切っている。平面は長軸125cm・短軸90cmの楕円形で、深さは20cmである。底面は長軸90cm・短軸75cmの楕円形を呈し、凹凸がある。壁は、急角度に立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は、炭化物・焼土を含む黒褐色シルト質粘土・にぶい黄褐色粘土である。堆積土中から土師器・須恵器が出土している。

S K 22土坑

Q-1区で検出されている。平面形は長軸で75cm・短軸で60cmの楕円形で、深さは25cmである。底面は長軸60cm・短軸20cmの長楕円形を呈しやや窪み、壁は東側で急角度に立ち上がり、西側はテラス状に段がつく。断面形は仄な逆台形である。堆積土は、炭化物・焼土を含む黒褐色シルト質粘土・暗褐色粘土・黄褐色シルトである。堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から土師器・須恵器が出土している。

S K 23土坑

P-1区で検出されている。西側が調査区外にのびるため全体の平面形は判明しないが、平面形長軸1m・短軸0.4m以上の楕円形と推定される。深さは30cmである。底面は長軸30cm・短軸20cm以上の楕円形と推定される。壁は西側で急角度に立ち上がり、東側はテラス状に段がつく。断面形は仄な逆台形である。堆積土は、暗褐色シルト質粘土・黄褐色シルトである。堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から土師器・須恵器が出土している。

S K 24土坑

Q-1区で検出されている。S K21に切られている。平面形は長軸で115cm・短軸で45cmの楕円形で、深さは20cmである。底面は長軸60cm・短軸30cmの楕円形を呈し、凹凸がみられる。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は炭化物・焼土を含む黒褐色粘土である。堆積土の状況から人為堆積とみられる。出土遺物はない。

S K 25土坑

W-1・2区で検出されている。S D24・38・小溝群②(S D30)・ピットを切っている。平面形は長軸1.85m・短軸1.65mの長方形で、深さは20cmである。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は、黒褐色シルト質粘土と黄褐色シルトからなる。中世陶器が出土している。

S K 26井戸跡

X-11区で検出されている。S D27を切っている。平面形は長軸2.0m・短軸1.7mの不整形

の梢円形である。深さは1.9mである。底面は径70cmの不整円形を呈し、壁は急角度に立ち上がり、中位で南側でテラス状の段がつく。断面形は円筒形である。堆積土は、上位では黒褐色の砂質シルト・中位では粘性のやや強い土・下位ではグライ化した砂質シルトである。上部は堆積の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から中世陶器・木片・薬・蝶が出土している。

S K 27井戸跡

X-12区で検出されている。S D27を切っている。東側の半分が調査区外にのびるため全体の形態は判明しないが、平面形は径1.5mの円形と推定される。深さは1.7mである。底面は径60cmの不整円形を呈すると推定され、壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位で北側にテラス状の段がつく。断面形は漏斗形である。堆積土は、上位は灰黄褐色および黄橙色の粘土質シルトで中位は黒褐色の粘土になり、下位では小蝶を含む黒褐色の砂質シルトになる。上部は堆積土の状況から人為堆積とみられる。箸が出土している。

S K 28土坑

Y-0区の北壁で検出されている。S D38を切っている。北側の大部分が調査区外へ延びるため全体の形態は判明しないが、平面形は径1.1m以上の円形と推定される。深さは70cmである。底面は径30cm以上の円形を呈すると推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、中位で西側でテラス状の段がつく。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色のシルト質粘土である。堆積土中から蝶が出土している。

S K 29井戸跡

X-4区で検出されている。S D29を切っている。東側の半分が調査区外にのびるため全体の形態は判明しないが、平面形は径1.6mの円形と推定される。深さは2.15mである。底面は長軸60cm・短軸45cmの梢円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位から南側でひらく。断面形は漏斗形である。堆積土は、上位では黒褐色・灰黄褐色・黄橙色のシルト・明黄褐色の砂質シルトで、中位では黒褐色の粘土質シルト、下位ではグライ化した灰色砂になる。上部は堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から中世陶器・木片が出土している。

S K 30井戸跡

X-4・5区で検出されている。S D28を切っている。平面形は長軸1.2m・短軸1mの梢円形を呈し平坦である。壁の崩落のため底面の確認はしていないが、深さは1.7m以上で、底面は70cm以下の円形を呈すると推定される。断面は円筒形である。堆積土は、灰黄褐色砂質シルト・にぶい黄橙色シルト質砂・黒褐色粘土である。上部は堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から中世陶器が出土している。

S K 31井戸跡

X-7・8区で検出されている。小溝群③(S D42)・S A 3を切っている。平面形は長軸1.7

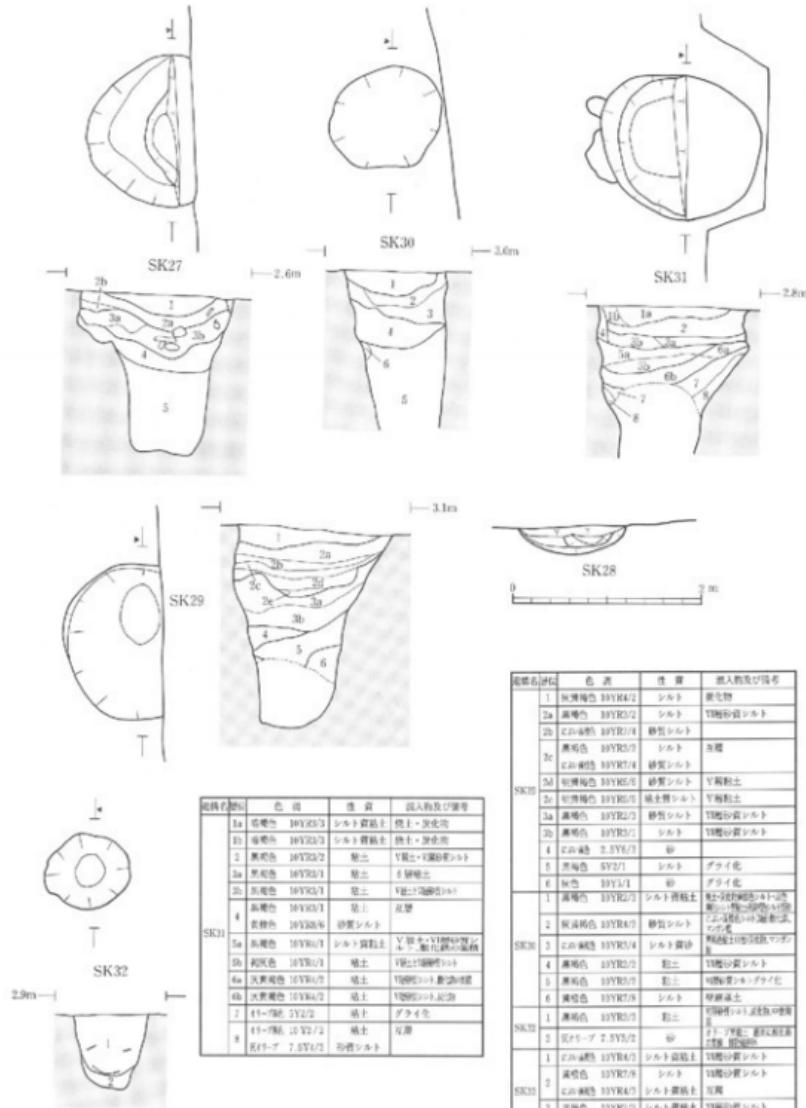


図17 土坑V

m・短軸1.5mの楕円形を呈する。壁の崩落のため底面の確認はしていないが、深さは1.65m以上で、底面は70cm以下の円形を呈すると推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南側が広がる。断面形は漏斗形である。堆積土は、上位では暗褐色シルト質粘土・黒褐色粘土、中位では灰黄褐色粘土、下位ではグライ化したオリーブ黒色粘土である。上部は堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から中世陶器・釘・木片が出土している。

S K 32土坑

Y-7区で検出されている。平面形は長軸90cm・短軸80cmの楕円形を呈し、深さは80cmである。底面は長軸40cm・短軸35cmの楕円形を呈しゆるやかに窪み、壁は急角度に立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黄橙色シルトを含む黒褐色粘土・グライ化したオリーブ黒色粘土を含む灰オリーブ砂である。堆積土中から一括の中世陶器甕が出土している。

S K 33土坑

Y-10・11区で検出されている。平面形は長軸60cm・短軸50cmの楕円形を呈し、深さは25cmである。底面は径30cmの不整円形を呈し平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黄橙色シルト・黒褐色シルト質粘土である。出土遺物はない。

S K 34土坑

Y-8区で検出されている。平面形は長軸90cm・短軸80cmの長方形を呈し、深さは15cmである。底面に凹凸があり、中央部に径15cmで深さ15cmのピットがみられる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色シルト質粘土・黄橙色シルトである。釘が出土している。

S K 35井戸跡

Y-11区で検出されている。S A 4を切っている。平面形は長軸90cm・短軸75cmの楕円形を呈している。出水のため底面の確認はしていないが、深さは確認面より1m以上で、底面は60cm以下の円形を呈すると推定される。断面は円筒形である。堆積土は、黒褐色粘土・黄橙色シルトである。堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土から礫が出土している。

S K 36井戸跡

X-13区で検出されている。平面形は径85cmの不整形の円形を呈している。出水のため底面の確認はしていないが、深さは1.1m以上で、底面は70cm以下の円形を呈すると推定される。断面は円筒形である。堆積土は、VI層シルトを含む暗褐色シルト質粘土・黒褐色粘土である。上部は堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から礫が出土している。

5、掘立柱列・掘立建物跡・ピット

S A 1掘立柱列

M-6・7区で検出された。南北に延びる柱列3間(北より2.0m+1.7m+1.7m、総長5.4

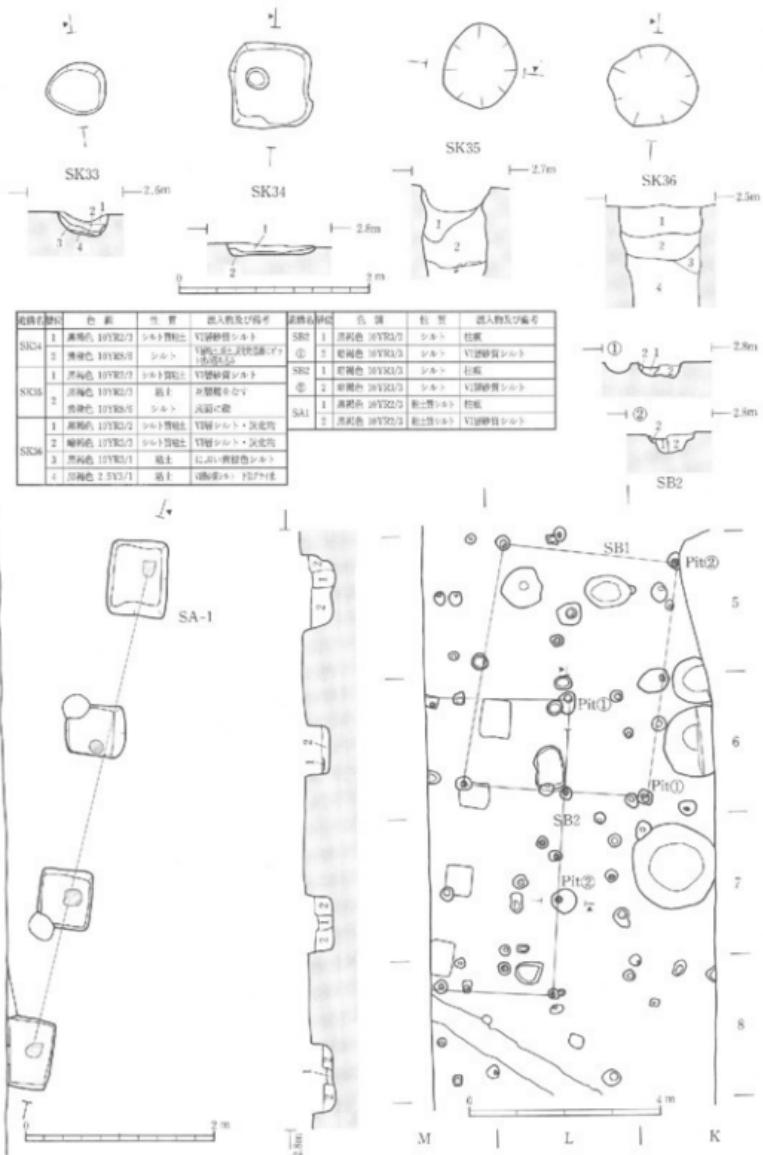


図18 土坑VI及び掘立柱列・掘立柱建物跡

m) を確認した。柱穴の掘り方平面形は、両端の 2 基が南北辺 70~80cm・東西辺 50cm の長方形で、中の 2 基が 60cm の方形を呈する。深さは 25~35cm を計る。柱痕跡はすべての柱穴にみられ、15~20cm の円形あるいは橢円形を呈している。柱穴の埋め土は黒褐色のシルトで VI 層の土を含むものもある。柱穴の埴土から土師器片が出土している。S B 1・2 と溝状落ち込みに切られている。磁北に対して 20 度東に偏る。1 号住居跡の南北軸とほぼ同一方向である。西に伸びる建物跡の可能性もある。

S A 2 掘立柱列

K~M-11 区で検出された。東西に延びる柱列 3 間（西より 1.8m+1.9m+1.7m、総長 5.4m）を確認した。柱穴は径 20~40cm・深さ 15~25cm の不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。柱穴ビット①より須恵器片及び近世の磁器が出土している。S D 3 を切っている。磁北に対して 85 度西に偏る。

S A 3 掘立柱列

X~Z-4~8 区で検出された。東西に延びる柱列 2 間（西より 1.8m+1.9m、総長 3.7m）・南北 4 間（北より 2.6m+2.7m+2.6m+2.4m、総長 11.3m）を確認した。柱穴は径 20~30cm・深さ 15~45cm の不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。ビット①より土師器片が出土している。S D 28 を切って、S K 31 に切られている。磁北に対して 1 度西に偏る。

S A 4 掘立柱列

X~Z-7 区で確認された。柱列東西 3 間（西より 2.1m+2.1m+1.8m、総長 6.0m）を確認した。柱穴は径 20~60cm・深さ 15~30cm の不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。ビット①・②より漆片が出土している。磁北に対してほぼ直交する。

S A 5 掘立柱列

X~Z-9 区で確認された。柱列東西 2 間（西より 2.2m+2.6m、総長 4.8m）を確認した。柱穴は径 20~25cm・深さ 20~30cm の不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。S D 43 を切っている。磁北に対してほぼ直交する。S A 4 と組み合う建物跡の可能性もある。

S B 1 掘立柱建物跡

K~M-5・6 区で検出した。桁行 2 間（西列 2.5m+2.5m、総長 5.0m）梁行 2 間（南列 1.8m+1.9m、総長 3.7m）の南北棟の建物である。柱穴は径 25~40cm・深さ 25~45cm の不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。ビット①・②は偏平な石を礎盤にしている。S A 1 を切っている。磁北に対して 15 度東に偏る。

S B 2 挖立柱建物跡

L・M-6～8区で検出した。南柱列2間以上(1.9m+@)・東柱列3間(2.1m+2.1m+2.0m、総長6.2m)の建物跡である。柱穴は径20～50cmの不整形の円形を呈し、深さ15～40cmを計る。埋土は明黄褐色砂質シルトを含む暗褐色シルトである。S A 1を切っている。磁北に対して10度東に偏る。

S B 3 挖立柱建物跡

X・Y-1・2区で検出した。東西2間(西より2.4m+2.4m、総長4.8m)・南北1間(4.0m)の建物跡として確認した。柱穴は径20～25cm・深さ25～35cmの不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。S D27を切っている。磁北に対して4度東に偏る。本来は南北2間×東西2間の東西棟の建物跡と考えられる。

S B 4 挖立柱建物跡

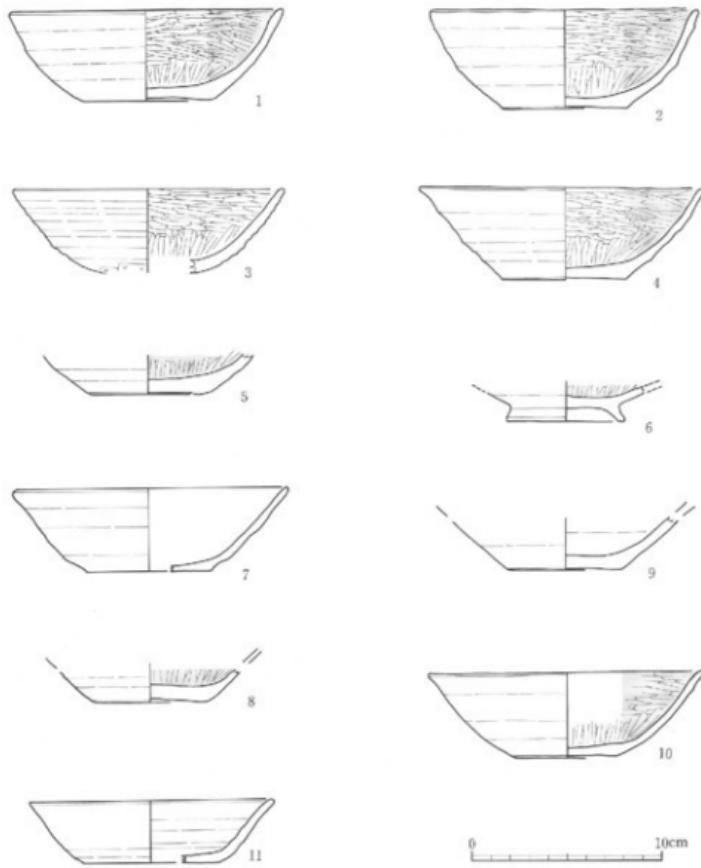
Y・Z-11・12区で検出した。東西2間(西より1.8m+1.8m、総長3.6m)以上、南北3間(北より1.7m+1.7m+1.7m、総長5.1m)の建物跡を確認した。柱穴は径20～25cm・深さ50～60cmの不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。S K35に切られている。磁北に対して1度西に偏る。ピット①・②・③は小礫を敷き詰めて礫盤としている。

Pit19 中世陶器の甕を礫盤にしている。

Pit135 土師器の壺が出土している。

Pit140・137 土師器の甕の破片がそれぞれ出土している。近接する地点に土師器の壺が出土しているSK21・22がある。

その他、掘立柱列・掘立柱建物跡以外にも柱穴と思われるピットが多数検出されたが調査区の制約等で、掘立柱建物跡ないし柱列と認定できなかった。



番号	種別	西側	東側	埋位	外表面模	底	内面調査	口径	底径	厚	高	備考	写真
19-1	土師器	坪	SK22 1層	ロクロ調査	印伝赤切り	ヘラミガキ	黒色処理	14.5	8.8	4.8		77-19	
19-2	土師器	坪	SK22 1層	ロクロ調査	印伝赤切り	ヘラミガキ	黒色処理	14.3	6.4	5.3		77-18	
19-3	土師器	坪	SK22 1層	ロクロ調査	ヘラミガキ	黒色処理	14.4	13.2	(4.4)		77-19		
19-4	土師器	坪	SK22 裏肉	ロクロ調査	印伝赤切り	ヘラミガキ	黒色処理	13.2	6.5	5.0		77-15	
19-5	土師器	坪	NK22 脱肉	ロクロ調査	印伝赤切り	ヘラミガキ	黒色処理						
19-6	土師器	坪	NK22 脱肉	ロクロ調査	印伝赤切り	ヘラミガキ	黒色処理		6.5(底直径)				
19-7	土師器	坪	SK22 1層	ロクロ調査	印伝赤切り	ロクロ調査		14.5	8.6	4.4			
19-8	土師器	坪	SK22 1層	ロクロ調査	印伝赤切り	ヘラミガキ	油色処理			6.0			
19-9	赤燒土器	坪	SK22 1層	ロクロ調査	印伝赤切り	ロクロ調査				6.0			
19-10	土師器	坪	ピット135	ロクロ調査	印伝赤切り	ロクロ調査		14.6	8.1	4.5			
19-11	土師器	坪	Q-8 区	ロクロ調査	印伝赤切り	ロクロ調査		13.0	7.0	3.3	火跡		

図19 土師器・須恵器

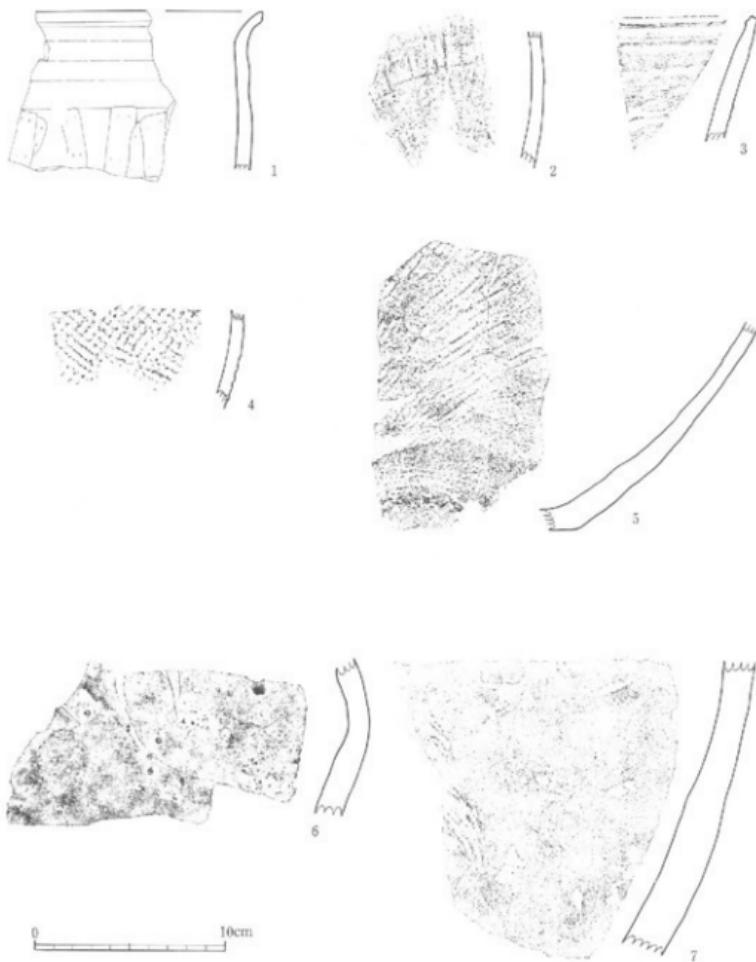
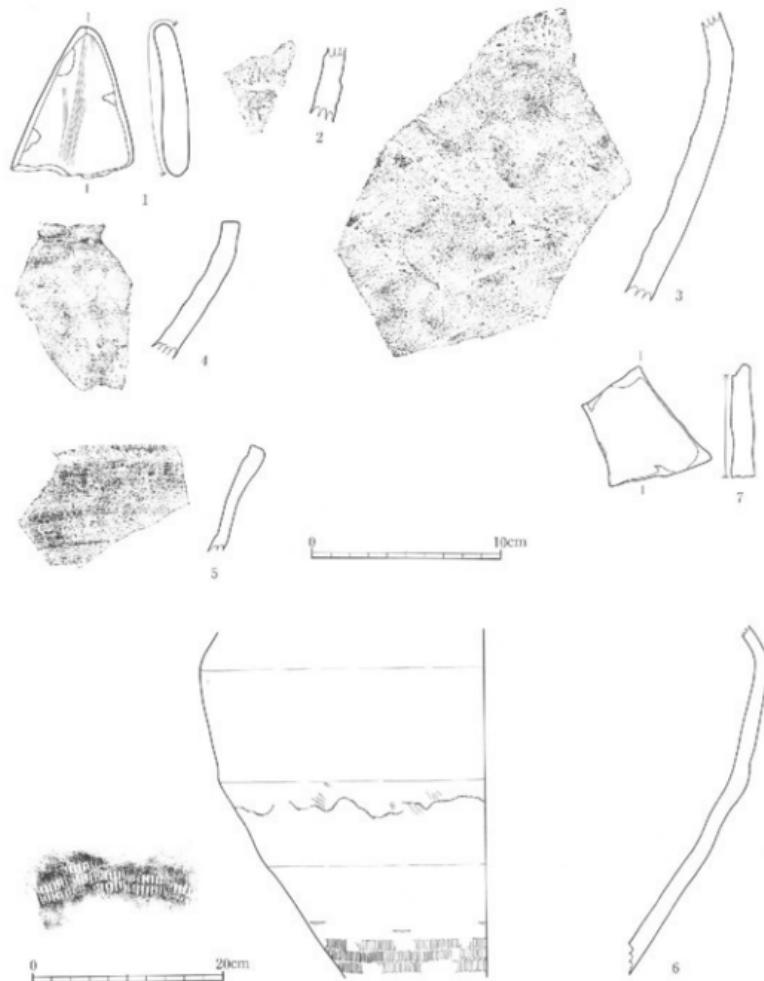


図20 土師器・須恵器・陶器（中世）

品号	種別	目録	地点	層位	特徴		年表
					外	内	
20-1	土師器	瓶	SKII	1層	外ロクロ透窓・ケズル、内ロクロ漏窓		
20-2	土師器	瓶	SA 2 PH	④	外平行引き目、内ロクロ漏窓		
20-3	土師器	杯	SD 2	褐色土	外ロクロ透窓、内ロクロ漏窓		
20-4	土師器	罐	Q-6区		外格子焼き目、内ロクロ漏窓		79-11
20-5	土師器	罐	K-7区	V層	外平行引き目、内ロクロ漏窓		
20-6	陶器	罐?	SK 1	褐土	外自然釉、内翻模板、充塞泥、牛骨		
20-7	陶器	瓶	SK 1	基?層	透窓目、内瓦状釉、13c後半~14c後半		



番号	種類	器種	焼成	調査	特 徴	出 地	時 期	写真
21-1	陶器	便	SK26	2b 通	折西に腰窓、瓶口に斜用	吉備	中世	76-1
21-2	陶器	便	SK26	2b 通	外腹印凹	石山 5 窓	13後~14前	
21-3	陶器	便	SK29	3 通	内外面アケ	石丸 4 窓	13後~14前	
21-4	陶器	便	SK30	器 3 通	内外面ナゲ也斜ア	石丸 4 窓	13後~14前	76-2
21-5	陶器	便	SD27	洗面	内外面クロコナギ 狹縫	山形県東北	13C	
21-6	陶器	便	SK32	埋土	外腹ナギ腰口事 粘土混み質 内窓ナギ 深径40cm	石丸 5 窓	13後~14前	76-3
21-7	陶器	便	SK 2	埋土	内外面アケ 内面腰窓	吉備	中世	

図21 陶器（中世）

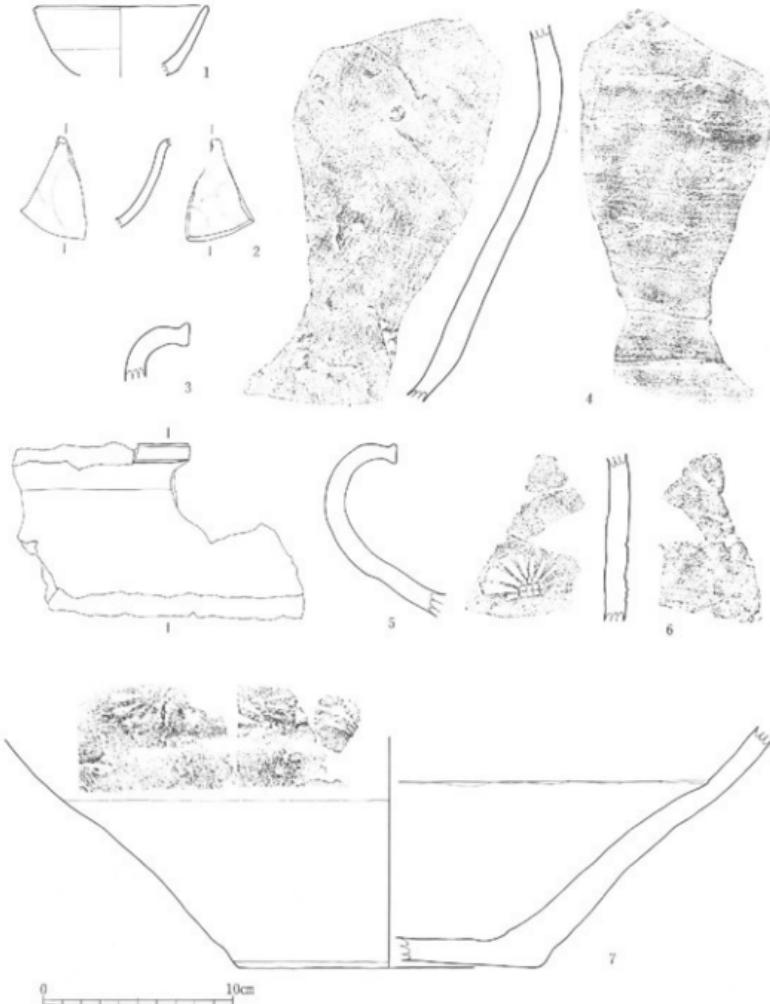


図22 陶器・磁器（中世）

番号	種別	品種	地點	層位	特徴	測定	時 期	年 代
22-1	白磁	碗	SKD19	3層	純白色釉 菊文 口徑9.5cm	中間	13c-14c	
22-2	青磁	碗	SKD16	3層	青磁釉青花 菊紋	中間	13c後半	13-2
22-3	青磁	碟	SK-2	埋土	受け口付、5、6、7上印一か?	完全	13c前半	13-2
22-4	青磁	碟	K-9区	埋土	内外青ナラ 抹土痕	試験	13c-13c	
22-5	青磁	碟	K-9区	埋土	内外青ナラ 受け口付	完全	13c後半	13-5
22-6	青磁	碟	K-9区	埋土	内外青ナラ 抹土痕小底	完全	13c後半	13-6
22-7	青磁	碟	PUL9	内外青ナラ 抹土	底上積み底 番大径40.3cm、底径36cm	完全	13c後半	13-8

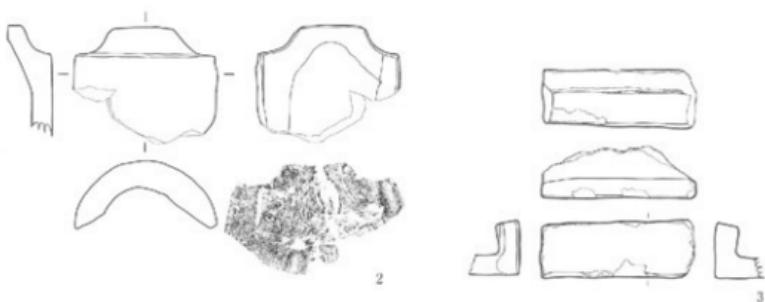


番号	種別	形態	地	性	圖	地	時	代
23-1	漆付印	豆	SK 2	堆土	高台飾「為了？」漆込み豆花	肥前	18c	7
23-2	漆付印	豆	SK 2	堆土	見込み三款樂文	近畿	16c	後半
23-3	漆付印	豆	SK 2	堆土	高ガラスによる柄き詰め	近畿	19c	前半
23-4	漆付印	碗	SK 2	堆土	見込み模	近畿	18c	9
23-5	漆器	碗	SK15	埋土	模	大垣相馬	18c~	
23-6	漆付印	豆	SK15	堆土	高台に漆付蓋	近畿	16c	後半
23-7	漆器	盤	SK15	堆土	模	岸誠	17c	9
23-8	漆器	盤	SK15	堆土	模	分更茶	17c	9-10
23-9	漆器	碗	SK13	上板	模	美濃御印	18c	9-1
23-10	土的質土器皿	SK13	下板	ロクア底堅中板	1.6cm	近畿	18c	11
23-11	土的質土器皿	SK13	上板	油面付蓋	縦羽目	近畿	18c	
23-12	陶器	網	L144 K	表板	模	大垣相馬	18c~	2

図23 陶器・磁器（近世）



0 10cm



0 20cm

番号	種別	地点	断面	高さ	幅	厚さ	備考	写真
24-1	鹿角粘合	SK. 8	3層	(26.2)	4.5mm	2.5mm	加工痕 異常自然剥離	80-14
24-2	瓦	SK. 2	廻土	(12.5)	15.2	9.1	外面ナゲ・ケズリ 内面ナゲ・ケズリ・崩口 高さ 2.6cm の玉縁	80-2
24-3	瓦	SK. 2	廻土	16.9	9.8	2.4	外面ナゲ・ケズリ 内面ナゲ・ケズリ L字状	80-3

図24 鹿角製品・瓦

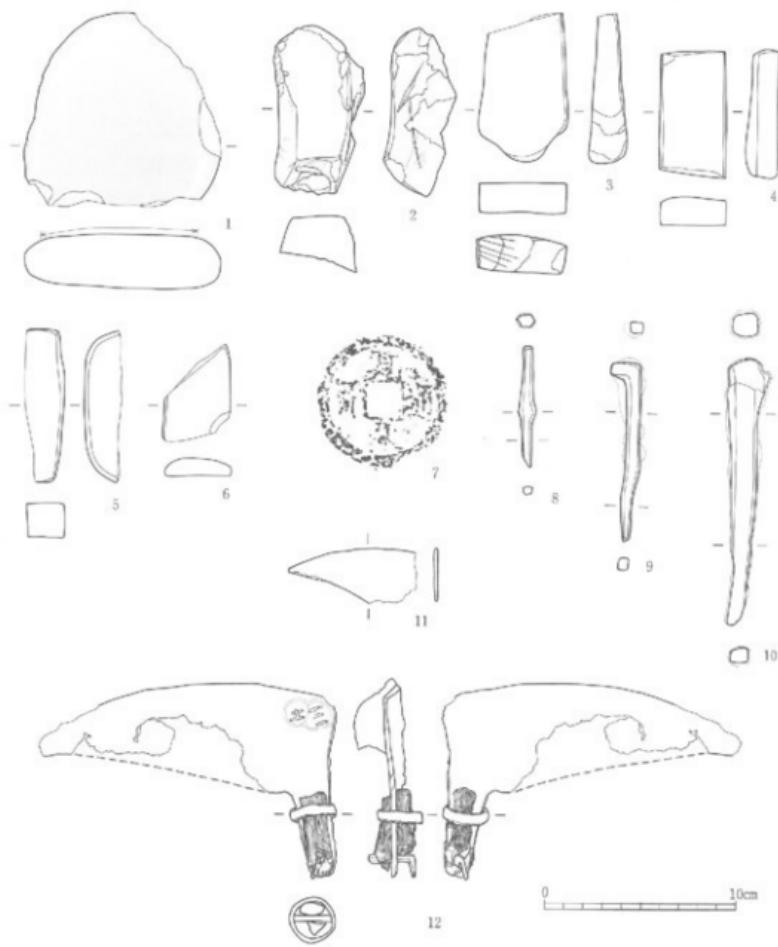


図25 石製品・金属製品

番号	種別	地点	層位	長さ	幅	厚さ	材質	傷	参考	重量	寸法
29-1	磨研をもつ櫛	SK 1	堆土	10.2	15.2	2.9	安山岩	凸凹状の櫛	1実に割れ	450g	80-8
29-2	石器	SB 1	Pm (1)	8.8	4.0	3.0	石灰岩	上面研磨	斜面あり	140g	80-4
29-3	石器	SB16	カクラン	38.11	6.7	1.6	石灰岩	上面研磨	斜面あり	112g	80-3
29-4	加工面をもつ櫛	SK27	堆土	6.6	3.4	1.5	酸化鉄質物	上面研磨している		50g	80-9
29-5	加工面をもつ櫛	SK 2	堆土	8.1	2.0	2.0	酸化鉄質物	上面研磨している		50g	80-7
29-6	加工面をもつ櫛	C 1 BC	巨層	5.0	4.4	1.0	石灰岩	上面研磨	上面研磨している	45g	80-6
29-7	吉鉢	SK15	堆土	2.3	2.3	1.0	泥水	泥水迷宮			80-14
29-8	焼灰削製品	SK 2	堆土	(8.5)	0.8	1.0		削面	削面		80-11
29-9	灰	SK24	堆土	9.6	0.7	0.7		削面	削面の内凹		80-12
29-10	灰	SK21	堆土	14.2	1.3	1.0		削面	削面の内凹		80-13
29-11	灰	SK 4	堆土	(6.7)	2.9	0.2		火光			80-9
29-12	灰	SK19	堆土	(6.2)鉱物	2.7	0.3		手平に研磨	研磨		80-10

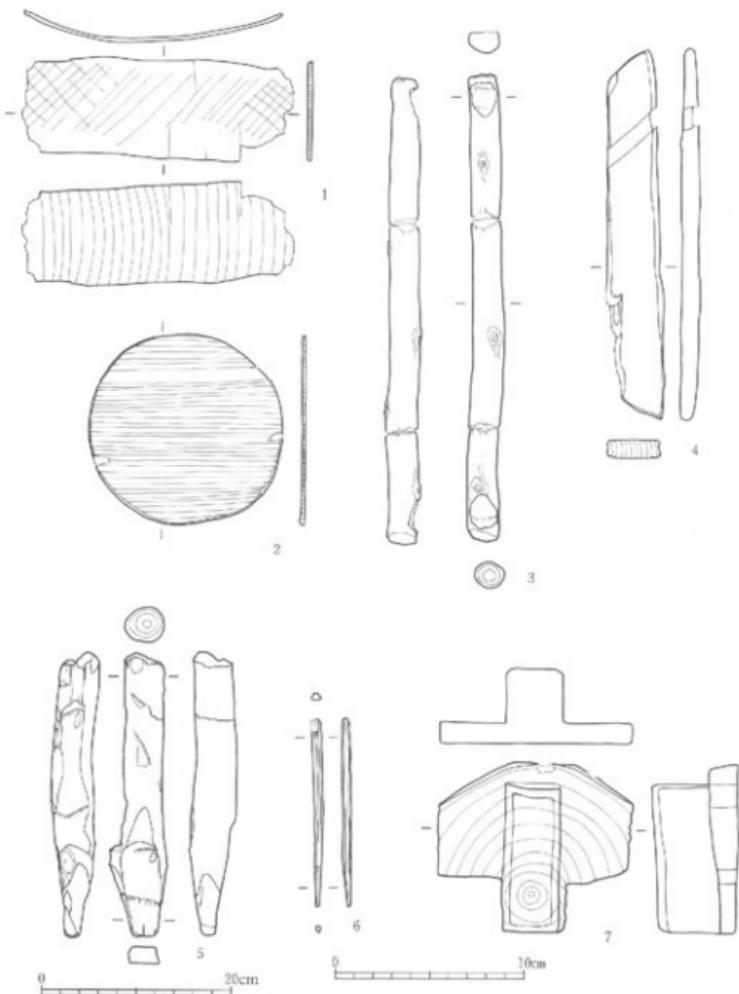
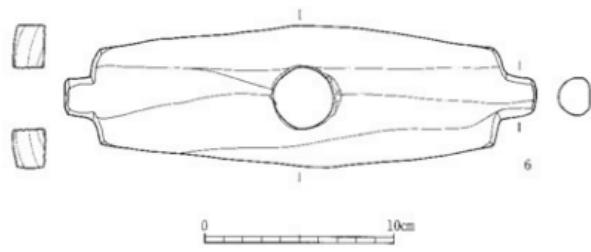
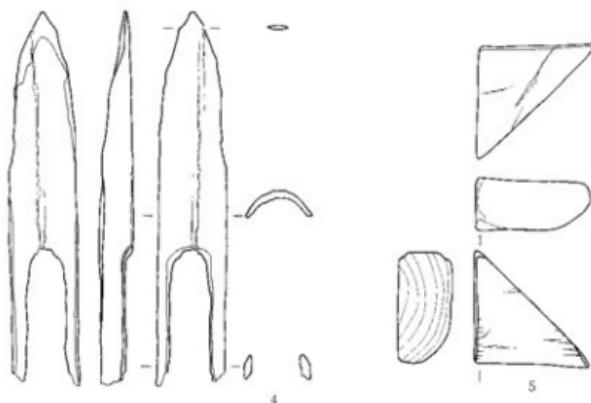
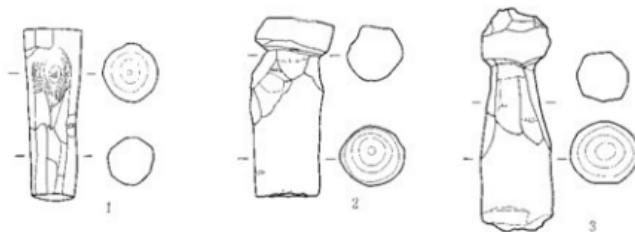


図26 木製品 I

番号	概説	地点	縦幅	高さ	幅	厚さ	木取り	備考	写真
26-1	舟形側板	SK 1	縦上 (28.5)	15.4	0.5	0.5	板	内面に格子状のけりき縫 外面に平行にけりき縫	写真-1
26-2	舟形底板	SK 1	縦上 (29.4)	20.25	0.5	0.5	板	他の何物あり	写真-2
26-3	舟手	SK 1	縦上 (24.9)	2.7	0.5	1.150	丸材	表面に孔をもつておいている	写真-3
26-4	帆柱木製品	SK21	縦上 (19.5)	2.5	0.5	0.5	柱	突けている	写真-4
26-5	帆	SK 3	縦 (30.0)	6.2	0.5	0.5	丸太材	先端部分に側面を残している	写真-5
26-6	茎	SK27	縦上 (19.0)	0.5	0.5	0.5	茎	表面は方形にない	写真-6
26-7	茎	SK 2	縦上 (8.9)	10.0	4.6	0.5	茎丸材	一頭丸頭 一本で作る	写真-7



番号	樹種	乾燥	厚さ	高さ	幅	厚さ	形状	寸	考	可
27-1	杉	SK15	珪土	9.1	3.0	3.0	3.1直角	丸太材	下先端に凹みあり	81-11
27-2	木綿	SK15	珪土	11.8	3.8	3.8	3.4直角	丸太材	底度を残している。刃り込み部に溝あり	81-9
27-3	小榧	SK15	珪土	9.5	3.8	3.8	3.2直角	丸太材	底度を残している。刃り込み部に溝あり	81-10
27-4	竹製鉤	SK15	珪土	(19.9)	3.6	1.3	約1.5	竹材	半斜・先端加工・一直行大縫	81-13
27-5	三角状木製品	SK15	珪土	6.0	6.0	2.9	斜目			81-12
27-6	楔子	SK15	珪土	24.8	7.5	1.7	有目	斜2.0cm・高さ1.5-2cmの細縫。直径3.6mm丸		81-8

図27 木製品 II

第VI章. 遺物について

1. 古墳時代前期の土器（方形周溝墓出土土師器）（図7）

1号方形周溝墓より土師器壺、3号方形周溝墓より壺（註1）、2号方形周溝墓より土師器片が出土している。

壺＝体部資料が欠損し全体の器形が把握できないが、二重口縁で底部穿孔のものである。磨耗のため部分的な確認ではあるが、赤彩が施されていたと考えられる。口縁部は頸部から急角度にまっすぐに立上がり、上方で外反し段を形成する。段の上部は大きく外反し口唇部に至る。体部は底部から外傾して立上がり徐々に丸みをもって頸部へと続く球形である。底部は平底で焼成前に穿けた孔がある。器面調整は外面に横ナデ・ヘラミガキ、内面は口縁部に横ナデが施されており、体部には輪積痕跡を残している。法量は口径15.5cm・器高推定23cmほどを計る。類似の資料として、安久東遺跡方形周溝墓（土岐山：1980）・今熊野遺跡第1号方形周溝墓（丹羽：1985）のものがある。安久東遺跡のものは口径18～21cm・器高25～27cmを計り、口縁部の段が明瞭にでており、体部は球形に近い。今熊野遺跡のものは口径21～25cm・器高26～31cmを計り、口縁部の段が弱く、体部は長胴気味になる。1号方形周溝墓の壺は口縁部の段の形態が安久東遺跡のものほど明瞭になっていないが、今熊野遺跡のものよりはっきりしている。また体部も長胴気味の球形で、安久東遺跡・今熊野遺跡出土壺の中間的な様相を呈している。法量は1号方形周溝墓の壺が他の二つの遺跡の壺に比べて小さい。これらの壺は東北地方の土師器編年で塙釜式（氏家：1957）に比定される。安久東遺跡方形周溝墓出土の壺は丹羽編年案（丹羽：1985）では塙釜式のII A段階に、今熊野遺跡第1号方形周溝墓はII B段階に位置づけられている。よって1号方形周溝墓出土の壺はII A段階後半でII B段階により近いと考えられる。（註2）

壺＝口縁部から体部にかけて内外面に強い棱、屈曲をもつ。底部は丸底に近い平底で、円形に割り取り凹面としている。体部は内弯しながら立上がり、丸みをもっている。口縁部は外面で外傾気味に立上がり、口唇部で外反し口縁部下部が肥厚している。器面調整は口縁部は横ナデの後ヘラミガキ、体部は横方向のヘラミガキで部分的にハケメが見られ、下部はヘラケズリの後ヘラミガキである。内面は全面ヘラミガキで底面近くに粗痕がみられる。口縁部と体部の高さの比率はほぼ1対2である。類似する資料として、大橋遺跡3号住居跡出土壺I A 3類（太田：1980）・六反田遺跡4号住居跡1号土坑出土壺A（佐藤：1987）・伊治城跡S D-260・261壺①（佐藤：1992）がある。大橋遺跡のものは口縁部が内弯し屈曲部の上方に軽い稜をもつという相違点がある。このことから、3号方形周溝墓の壺の口縁部の下端の肥厚が大橋遺跡の壺に比べて退化傾向にあると考えられる。六反田遺跡の壺Aは、3号方形周溝墓の壺に比べて器

高が口縁径に対して低いという相違点がある。伊治城跡の環①は大型だが器形はほぼ同じである。以上のことより、本遺跡の环は大橋遺跡のものより新しく、伊治城跡の环①と同時期で、六反田遺跡のものより古いと考えられる。大橋遺跡2号住居跡はI段階に、六反田遺跡4号住居跡はII～III段階に、伊治城跡SD-260・261はII段階に位置づけられている。このことから3号方形周溝墓の环はおおむねII段階におさまるものと考えられる。

遺物が少なく断定は難しいが、1号・3号方形周溝墓の年代はおおむね丹羽編年案のII段階に位置づけられる。2号方形周溝墓も形態と位置関係から同時期と考えられる。

2. 古代の土器

古代の土器は土師器の环・高台付环・甕、須恵器の环・甕・鉢、赤焼土器の环(註)がある。

S I 1 住居跡出土土器(図6)

S I 1の2層および床面のものは、出土状況から住居廃絶時の一括資料である。

土師器=环の図示資料が2点ある。2点ともロクロ使用のものである。1は底部端から口縁部にかけて内窓気味に立ち上がり、口唇部で外反する。底部は回転糸切りのあと、底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリの再調整が施されている。口径と底径の比は0.38である。2は底部端から口縁部にかけて内窓気味に立ち上がる。底部は回転糸切りの無調整で、口径と底径の比は0.43である。

赤焼土器=环の図示資料が6点ある。6点とも底部端から口縁部にかけて内窓気味に立ち上がり、口唇部でそのまま外傾するものが4点(3・4・5・7)と、やや外反するものが2点(6・8)ある。底部は回転糸切りの無調整で、口径に対して底径が小さく、その比は0.40～0.44であり、内面には外面に比べて頗著なロクロ目がみられない。3・4・5にはカーボンの付着がみられ、燈明具に使われた可能性がある。また、3点とも底部に切り離し時に付いた粘土の高まりを残している。6・7・8は、内面にロクロ目はほとんどみられず、当然具となるものの螺旋状の筋が体部下半から口縁部下端にかけてみられる。口縁上部にはロクロ調整が見られる。6は、外面のロクロ目が頗著である。7は底面のみミガキ状の調整があり平滑となっている。8は2度の切り離しの痕跡がみられ、底面中央に補修のためのナデつけがある。1・4・7は3枚重ねで出土している。

その他の破片資料

堆積土1層より土師器环の底部資料(手持ちヘラケズリ)1点・口縁部資料1点・赤焼土器环の底部資料1点・口縁部資料2点・非ロクロ土師器の体部資料2点・須恵器甕の体部資料1点がある。堆積土2層より赤焼土器环の底部資料1点・体部資料5点がある。床面より土師器の体部資料1点・赤焼土器环の口縁部3点・底部資料1点・体部資料3点がある。

S I 1出土土器は点数が少なく明確なことはいえないが特徴として次の事があげられる。

1. 土師器と赤焼土器はほぼ同形態をもつが土師器の方がやや大ぶりで胎土に荒い砂が混じる。
2. 赤焼土器で證明具に使われたものには、内面に整形の違いがある。
3. 赤焼土器は成形段階に省略がみられ、雑さが目立つ。
4. 口径と底径の比が0.40前後で底径がやや小さい。

S I 1 の土器群と器形・調整・土器組成の類似する周辺の遺跡として、中田畠中遺跡 1・2 号住居跡（佐藤：1985）・安久東遺跡 2 号住居跡がある。

中田畠中遺跡 1・2 号住居跡の主体をなす土師器III類と S I 1 出土の土師器及び赤焼土器は器形・調整法だけでなく法量も類似している。しかし、中田畠中遺跡では口径と底径の比が0.47以上と大きいI類や、口径が17cm以上の楕円形のII A類など、S I 1 で出土しなかった器形があり、壺全体に対する土師器の割合が中田畠中遺跡 1・2 号住居跡85%で S I 1 が29%という相違点がある。また、共伴関係で中田畠中遺跡では他に大型の土師器壺・土師器甕・鉢・須恵器壺・甕・壺が出土しているのに対して S I 1 では共伴関係で出土していない。

安久東遺跡 2 号住居跡の壺全体に対する土師器の割合は50%である。また、土師器・赤焼土器は、口径と底径の比が平均0.36と S I 1 より小さく、土師器の口径が13~14cmと16~17cmに、赤焼土器が13cm以下に集中しており、S I 1 の口径は土師器が15~15.5cm 赤焼土器が14~15cmとその集中部分に違いがある。

以上のことから、S I 1 の土器群は中田畠中遺跡 1・2 号住居跡出土土器群と同時期頃（赤焼土器の個体数の割合が大きいことを考慮すると、後出する可能性もある。）で安久東遺跡 2 号住居跡出土土器群より前出する年代が考えられる。これらの土器群は東北地方の土師器編年で表杉ノ入式に比定される。表杉ノ入式についてはおもに壺の形態・調整技法によって細分が試みられている（丹羽：1983）。これによると宮前遺跡第IV A群（20号住居跡）～青木遺跡21号住居跡～東山遺跡土器窯～家老内遺跡 2 号住居跡～安久東遺跡 2 号住居跡の変遷がとらえられている。東山遺跡土器窯が9世紀中葉（真山：1981）に、安久東遺跡 2 号住居跡を10世紀後半に比定（佐々木：1984）しており（註3）、家老内遺跡 2 号住居跡（真山：1981）はその中間的なものとしている。中田畠中 2 号住居跡は、家老内遺跡 2 号住居跡と同時期ととらえられており9世紀中葉以降10世紀前半以前の年代が与えられている。なお S I 1 の堆積土中より10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰（白鳥：1980・町田：1984）（註4）が含まれることも加味して、S I 1 出土の土器は9世紀後葉から10世紀初頭の年代が考えられる。

S I 1 出土以外の古代の土器

土師器

壺（図19）=底部端から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、底部の切り離しは回転糸切り

で無調整のものがほとんどで、3は体部下端が手持ちヘラケズリである。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。口径は14.2～15.2cm、口径と底径の比は0.36～0.47である。

高台付坏（図19-6）＝底部資料である。内面には黒色処理・ヘラミガキが施されている。底部の切り離しは回転糸切りである。

甕（図20-1）＝口縁部は頸部から「く」の字状に外反する。口唇端部に面をもっている。長胴を呈し、器面調整はロクロ調整が主で、外面下部にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。

坏の形態がS I 1出土土器と形態・調整が共通しており、同時期と考えられる。

須恵器

坏（図19）＝図示資料が2点ある。底部から内弯気味に外傾し立ち上り、口唇部でそのまま外傾するもの（7）とやや外反するもの（11）がある。2点とも底部の切り離しは回転糸切りで無調整で、内外面共にロクロナデが丁寧で凹凸がない。7は口径が14.5cm、口径と底径の比が0.46である。土師器坏（1・2・3）と共に伴している。11は口径が13cm、口径と底径の比が大きく0.53である。火拂がみられる。

甕（図20-2、4、5）＝破片資料である。成形はロクロ調整が主で、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。外面に平行の叩き（2・5）格子目の叩き（4）が施されている。その他SK20・21・22・23・S I 1より同一個体と考えられるものが出土している。

鉢（図20-3）＝口縁部の資料である。ロクロ調整でロクロ目がはっきりしている。

赤焼土器（図19-9）＝底部資料で内弯気味に外傾して立上がる。S I 1出土土器と同形態のものと考えられる。

社）ここで赤焼土器としたものは酸化炎焼成のもので、黒色処理・ヘラミガキの施されていないロクロ使用の土器の坏をさす。

3. 陶器

出土点数79点を数える。破片資料がほとんどである。产地同定ができるものには常滑・渥美・山茶碗窯系・在地・志野・唐津・瀬戸美濃・岸窯系・大堀相馬・堤がある。

常滑 甕13点、壺3点、鉢1点がある。図示資料は4点である。

甕＝図22-5・6は体部と口縁部の資料である。折り返しの口縁で、縁帯の端部が下方に少々垂れ下がったN字形を呈する。体部に菊花文の押印が見られる。図22-7は柱の礎盤に使われていたと考えられるもので、底部から体部にかけての資料で6と同じ押印が見られる。図22-3は口縁部の破片である。3・5・6・7は同一個体と考えられる。図21-1は断面・内面に磨面が見られ砥石に転用されたと考えられる。

壺＝図20-6は肩部の資料で自然釉がみられ光沢がある。

鉢=図21-7は体部の破片資料で内面に磨面がみられる。

渥美 壺3点がある。図示資料は1点である。図22-4は体部破片資料で胎土が粗粒である。もう2点は自然釉がみられる。

山茶碗窯系 図21-5の鉢1点がある。体部から口縁部にかけての資料である。ロクロナデの痕跡が残る。灰釉が施されている。

在地産 壺10点・鉢3点・壺1点がある。図示資料は5点ある。

壺=図20-7は、焼き縮めが弱く、厚手で緑灰色を呈している。図21-3・4は、胎土が3層に分かれている。図21-6は底部・口縁部を意識的に打ちかいている。体部下部に押印が巡る。図21-2も押印がみられる。図20-7・図21-4は、断面に漆が付着しており、接合痕と考えられる。

鉢=写真78-4は片口の鉢である。その他、白石窯系（在地1類）の壺がある。胎土に長石が含まれる。（註5）

蒲津 皿・大鉢・碗が1点ずつある。碗は刷毛目文が施されている。

美濃（志野） 丸皿が1点ある。長石釉が施されている。

瀬戸美濃 碗1点・皿1点・擂鉢1点がある。図示資料は1点ある。

碗=図23-9は胎釉に白濁釉を流し掛けしている。

皿=灰釉が施されている。

擂鉢=写真78-13は外面に鉄釉が施されている。

岸窯系 擂鉢4点・鉢1点がある。図示資料は2点ある。

擂鉢=図23-7は体部資料で鉄釉をほどこしている。櫛目は9条以上1単位である。8は口唇部が外に張り出す。櫛目は9条1単位である。写真78-11は鉄釉を施している。

鉢=鉄釉を施している。

大堀相馬 碗7点・壺1点・土瓶3点・香炉1点・器種不明のもの4点がある。図示資料は2点ある。

碗=図23-5・12は灰釉を施している。

壺=体部の破片資料で胎釉を施している。

土瓶=体部資料1点・底部資料2点である。透明感のある胎釉が施されており山水文が描かれている。

香炉=外側に鉄釉、内面に白濁釉を施している。

不明品=体部破片資料で黒青色釉・灰釉・青釉を施している。

堤 鉢4点・擂鉢4点・焙烙1点・壺1点がある。

鉢=写真78-14は、体部の破片資料で鉄釉が施され、口縁部周辺はなまこ釉がみられる。

擂鉢=写真78-12は外面に鉄釉が施されている。

焙烙=把手の部分の破片である。

壺=写真78-15は体部の破片資料で鉄釉が施されている。突起が付く。

4. 磁器（染付）

出土点数17である。産地同定できたものは中国・肥前・瀬戸がある。

中国 盆が3点ある。図23-2は見込みに玉取獅子文が描かれている。図23-6は高台に砂の付着がある。

肥前 皿3点・碗8点・壺1点がある。

皿=図23-1は高台に「寿?」の銘があり、見込みに手書きの五弁花文が描かれている。

碗=図23-4は見込みに蝶が描かれている。写真79-10は、見込みに「[欠□]」の銘がある。

瀬戸 碗が2点ある。図23-3は鉛ガラスで焼き締ぎをした跡がある。

5. 青磁

中国産の碗・瓶類各1点がある。図22-2は口縁部の資料で端反りで、櫛描きの蓮弁文が描かれている。写真79-4は印花文が描かれている。

6. 白磁

中国産の無文の碗が1点ある。(図22-1)

7. 瓦質土器

鉢の体部破片が1点ある。胎土に砂が混じっている。

8. 土師質土器

皿が2点である。図23-10はロクロ調整で底部の切り離しは回転糸切りである。図23-11は油煙が付着しており燈明皿に使われたと考えられる。

9. 鹿角製品

鹿の角の枝の部分を切り取った跡や、面的に削った跡がみられる。端部は自然の剥離面である。現存長28.2cm・端部の断面の長軸4.5cm・周りの長さ13.5cmである。残存状況から製品とは考えにくく、母材になるものと考えられる。SK8出土。

10. 瓦

丸瓦(図24-2)=前方は欠損している。現存長12.5cm・幅15.2cm・厚さ3.2cmで長さ2.8cm・先端部幅6.4cmの玉縁が付く丸瓦である。外面はナデ・ケズリ調整で、内面は端部に面取りが、中央部には日の細かい布目がみられる。玉縁の両側辺は曲線を描いている。

道具瓦(図24-3)=現存長16cm・幅5.8cm・厚さ2.4cmのL字形を呈している。内外面ともナデ・ケズリ調整である。

11. 石製品（図25）

砥石 2 点・加工面をもつ石製品 3 点・磨面をもつ石製品 1 点がある。

砥石 = 2 は長さ 8.8cm・幅 4.6cm・厚さ 3 cm の不整の板状を呈する。3 面が砥面で線状の傷（擦痕）がみられる。S B 1 ピット①出土。3 は現存長 8.1cm・幅 4.6cm・厚さ 3 cm の短冊型で下部が欠損している。4 面が砥面で上端面に線状の傷（擦痕）がみられる。

加工面をもつ石製品 = 4 は長さ 6.6cm・幅 3.4cm・厚さ 1.5cm の長方形の板状のもので側面 3 面に加工面がある。温石と考えられる。S D 27 出土。5 は長さ 8.1cm・幅 2 cm・厚さ 2 cm の隅丸の長方形の右半部が欠損している。2 面に加工面がみられる。S K 2 出土。6 は長さ 5 cm・幅 4.4cm・厚さ 1 cm の偏平な半円形を呈しており、4 面に加工面がある。基本層位 II 層出土。

磨面をもつ石製品 = 1 は長さ 10.2cm・幅 15.2cm・厚さ 2.9cm の偏平な疊の 1 面が磨面になっている。煤の付着がみられる。S K 1 出土。

12. 金属製品（図25）

古銭 = 寛永通宝が 1 点ある。S K 15 出土。（7）

釘 = 9・10 の 2 点がある。9 は長さ 9.6cm・幅 0.7cm を 10 は長さ 14.2cm・幅 1.2cm を計る。両方とも断面は四角形で、頭が折れ曲っている。9 は S K 34 出土。10 は S K 31 出土。

棒状銅製品 = 8 は現存長 6.5cm・幅 0.8cm で両端が細くなり中央部分が太くなっている。鐵の可能性がある。S K 2 出土。

鎌 = 11 は刃先のみである。現存長 6.7cm・幅 2.9cm・厚さ 0.2cm である。S K 4 出土。12 は把手部の木質部が残る。刃部の推定長 16.2cm・幅 5.7cm・厚さ 0.3cm で、「吉三？」の銘が打ち込まれている。中子に目釘がある。S K 15 出土。

13. 木製品

曲物側板 = 図26-1 は外面に幅 0.8cm と 2 cm の格子目に、内面に幅 1 cm の平行状に斜引の切り込み線が施されている。

曲物底板 = 図26-2 は径 20.2cm・厚さ 0.5cm のやや歪んだ円形を呈する。漆の付着がある。

把手 = 図26-3 は長さ 24.9cm の丸材で、両端に三角形に抉りをいたるものである。

以上のものは S K 1 出土である。

板状木製品 = 図26-4 は長さ 19.5cm・幅 2.8cm・厚さ 1.1cm の柾目板の両端を三角に切り取っている。S K 31 出土。

杭 = 図26-5 は現存長 30cm・径 6.2cm で、先端を 4 面加工したものである。S K 3 出土。

箸 = 図26-6 は現存長 10cm で、幅 0.5cm 四角形に面取りをし、先端を細く削り出している。S K 27 出土。

蓋？ = 図26-7 は下部が欠損しているが、芯持ち材を厚さ 1.0～1.5cm の八角形に成形し 3

cm×7.8cm×3 cm の直方体の把手状の突起がつくものである。形状から作り出しの蓋と考えられる。SK 2出土。

栓=図27-1は長さ9.1cm・径3.0cmの丸材で下部を削り出し角ばった円形の棒状を成す。

木鍤=図27-2は長さ11.8cm・径3.8cm、3は長さ9.5cm・径3.8cmを計る。両方共端部の下に切り込みを入れ、こけし形の形態を成す。削り入れた部分の上部に溝が巡っている。俵や籠を編む道具と考えられる。

三角状木製品=図27-5は木の縁辺部を三角形に成型したもの。用途は不明である。

接手=図27-6は長さ24.8cm・幅7.5cm・厚さ1.7cmの柾目板の両端部に長さ2 cm・径1.5~2 cmの突起が付き、中央部に円形に径3.6cmの孔を穿ったものである。井戸の汲み桶に取り付けて使用したと考えられる。

以上のものはSK15出土のものである。

14. 竹製品

編み具=図27-4現存長19.9cm・幅3.6cmを計る。竹を半裁し先端を尖らせ、現存長7.4cm・幅12.3cmの抉りを入れている。網や俵や籠を編む道具と考えられる。SK15出土。

その他 幅0.5cm程に分割したものが多量にある。形状をとどめておらず竹籠や曲物のタガに使用したと考えられる。SK15出土。

第VII章 遺構について

1. 住居跡

平安時代の住居跡は1棟検出されたが、1棟だけ存在したとは考えにくく調査区外に居住域が広がると考えられる。

2. 方形周溝墓

方形周溝墓は3基とも全体を検出していないが、周溝の形態が隅の部分で細く浅く、中央部に向かって膨らみ深くなることや、同じような堆積土がレンズ状に堆積していることなど共通点がある。また、南西辺軸・南辺軸が1号方形周溝墓から3号方形周溝墓にかけて20度ずつ西に偏る傾向がある。1号方形周溝墓は他のものより大規模であり、底部穿孔の供獻用の壺が出士している。戸ノ内遺跡の方形周溝墓から丹羽編年案のI段階に位置づけられている頸部に刻日の施された隆帶をもつ二重口縁の壺が出土している。本遺跡の周溝墓はそれより後出するもので、戸ノ内遺跡にかけて古墳時代前期の墓域が広がっていると考えられる。

3. 溝跡

溝跡28条、小溝群3群が検出された。溝の方向性からみるとSD22・23・25・24・26・27・40（磁北に対して0~20度西に偏る）を一つのグループ、SD18・46・小溝群②・小溝群③（磁

北に対して37~50度東に偏る)を一つのグループ、S D 43・47・44(磁北に対して82~90度西に偏る)を一つのグループとみることができる。この溝の方向性・遺物・切合の関係から、年代を検討してみる。

S D 11は18世紀以降の近世陶器が出土していることや、III層上面で確認されていることから、近世と考えられる。S D 45は12世紀の青磁が出土しているが、III層上面で確認されていることから、近世と考えられる。S D 45・11は堆積土や形態が似ている。文政年間(1818~29年)に作られた「名取郡北方四良丸邑」繪図に描かれている「中屋敷」を巡る水路に位置的に合う。

S D 27からは13~14世紀の中世陶器が出土しており、鎌倉時代~南北朝時代頃のものと考えられる。底面に砂の堆積がみられ、水が流れていると考えられ堀の可能性もある。断定はできないが四郎丸館跡に関連するものと思われる。戸内内遺跡でも堀跡と考えられる溝跡(1・2・3号溝)が検出されている。文献資料によればこの時代曾我氏がこの地を治めていたとされている(曾我光高申状案他)。S D 27とS D 22・23・24・25はほぼ同方向に向いており、土師器片が出土している溝もあるが、同時期の可能性がある。特にS D 23は堆積土も似ている。

S D 28・小溝群②・③は同方向に向いており、同時期と考えられる。3号方形周溝墓を切ってS D 27に切られていることや、断面観察でS D 28・小溝群②がV層から掘り込まれていることから、平安時代以降鎌倉時代以前と考えられる。

S D 4・43は堆積土に灰白色火山灰を含むこと、須恵器壊・土師器片が出土していることから、S I 1とほぼ同じ時期と考えられる。S D 4とS D 2、S D 43とS D 47は平行関係にあり同時期の可能性がある。

小溝群①はS I 1に切られて2号方形周溝墓を切っていること、S I 1と方向性が同じことから、S I 1以前の平安前期と考えられる。

また、その他断面観察及び切り合いからS D 38・29は古墳時代~平安時代、S D 1・3・5・6・12・46は平安時代~中世、S D 26・40は中世、S D 44・48は近世と概ね考えられる。

以上のように溝跡は大きく近世・中世・S I 1と同時期あるいはそれ以降の平安時代・S I 1以前の平安時代のものと4時期に分けられる。

小溝群①②③は底面に耕作痕と考えられる半円状の窪みが連なる。畠に関する遺構と考えられる。

4. 土坑

18基確認されている。方形・円形・不整形のものがある。出土遺物が少なく遺構の性格は不明である。

S K 20・21・22・23は円形あるいは不整の円形を呈する。各土坑およびS I 1より同一個体と考えられる須恵器壊の破片が出土している。またS I 1と同じ時期の遺物が各土坑およびビ

ット135・137・140から出土している。よってこれらの遺構は、S I 1と同時期(9世紀後葉~10世紀初頭)と考えられる。調査区の制限もあり断定はできないが、位置的にも関連性が示唆される。

S K32は円形を呈している。中世陶器の壺が重なるようにして出土している。壺の年代よりS D27と同時期と考えられる。

S K19は円形をS K25は方形を呈している。両方とも中世陶器・白磁が出土していることより中世のものと考えられる。S K13は楕円形を呈している。18世紀の陶器と土師質土器が出土しており、近世のものと考えられる。

S K 5・S K34は方形を呈し中央にピット状の落ち込みが1個ある。

5. 井戸跡

17基検出された。S K 2以外は断面が円筒形あるいは漏斗形を呈し、素掘りの井戸である。漏斗形のものは壁上部の崩落のため、本来は円筒形を呈していたものが漏斗形になったと考えられる。S K 2は断面が逆台形を呈し、規模が掘り込み部分の長軸で2.3mを計り、井戸枠などの水留め施設があったと考えられ、掘り込み部分が二つある井戸である。

数基隣合ったり、堆積土の上部が人為堆積のものが多く、井戸枯れ等の理由で作り変えられたと考えられる。遺物及び切合い関係、断面観察からS K 2・3・4・15が近世、S K 1・6・11・26・27・29・30・31が中世、S K 8が平安時代のものと考えられる。

6. 掘立柱列・掘立柱建物跡

掘立柱列5列・掘立柱建物跡4棟確認されている。調査区に制限があるため、掘立柱列は掘立柱建物跡の可能性も考えられる。

S A 1はS I 1住居跡と方向が同じことや堆積土から土師器片・須恵器片が出土していることから、S I 1と関連するものと考えられる。

S A 3・4・5、S B 3・4は、S D27と平行関係、垂直関係にあり、S D27と同じ中世と考えられる。S A 2はピット①より19世紀以降の肥前の染付が出土していることより、近世と考えられる。S B 1・2は、S A 1を切っており平安以降であるが、周辺の遺構が近世のものが多く、近世のものと考えられる。

第VIII章. まとめ

1. 調査区は名取川が形成した標高2~4mの自然堤防上に立地し、古墳時代前期から近世までの遺構、遺物が発見された。
2. 古墳時代前期の方形周溝墓が調査区北側で3基検出された。戸ノ内遺跡で発見されている方形周溝墓と合わせて、この時期の墓域が広がることが確認された。

3. 平安時代の堅穴住居跡1棟(9世紀後葉～10世紀初頭)、掘立柱建物とも考えられる掘立柱列、井戸跡、土坑、溝跡、小溝状遺構群が検出された。有機的な遺構の組み合わせも考えられるが、調査区が限定されているため関係は不定である。
4. 中世の遺構として溝跡、井戸跡、土坑、掘立柱列、掘立柱建物跡が検出されている。13～14世紀の陶器・磁器が多く出土している。遺構は調査区西側に集中している。四郎丸館跡との関連が考えられるが、調査区の制約でまだ不明な点が多い。戸内遺跡で検出された堀跡も含めて考えていく必要がある。
5. 近世の溝跡、井戸跡、土坑、掘立柱列、掘立柱建物跡が検出され、18世紀以降の近世の陶器・磁器が多く出土している。「名取郡北方四良丸邑」繪図に載っている屋敷の跡に関係するものと推定される。調査区東側に集中している。

中世陶器・磁器産地別集計表(破片数)

器種	壺	甕	鉢	碗	瓶類	計
常滑	13	3	1			17
瀬美	3					3
山系窯系	1					1
陶	1類	2				2
在	2類					0
器	3類	2	1			3
地	4類	2	1	2		5
	5類	4				4
	小計	10	1	3		14
	不	明	2			2
	小	計	29	4	4	37
磁	青磁			1	1	2
器	白磁			1		1
	小	計			2	3
	合	計	29	4	4	40

近世の陶器・磁器の集計表(破片数)

器種	壺	甕	鉢	碗	皿	丸皿	土瓶	擂鉢	香炉	焰口	不明	計
陶	堤	1	4					4	1		10	
	大堀相馬	1		7			3	1		4	16	
	岸窯系		1					4			5	
	唐津系		1	1	1						3	
	瀬戸美濃			1	1			1			3	
	美濃志摩					1					1	
	不	明	1		2		1				4	
	小	計	1	2	8	9	3	1	3	9	1	42
	磁	肥前	1		8	3						12
	瀬戸			2								2
	器	中國				3						3
	小	計	1		10	6						17
	合	計	1	3	8	19	9	1	3	9	1	459

表1. 陶器・磁器集計表

遺構	層	種類	器種	座地	時 期	備 考	遺物番号	図	写真
S K 1	埋土	陶器	甕	常滑	中世		71		
		陶器	甕か甕	常滑	中世		7-2	20-6	
	3層	陶器	甕	在地1	13c 後～14c 前	白石窯	10		
		陶器	鉢	在地3	13c 後～14c 前		15		
		青磁	瓶類	中国	13c～14c	印花文	11		79-4
	4層	陶器	甕？	瀬美	12c～13c		132		
		陶器	鉢	在地3	13c 後～14c 前		135		
	最下層	陶器	甕	在地3	13c 後～14c 前	漆織ぎ	25	20-7	

表2. 陶器磁器観察表 I

遺構	層	種類	器種	產地	時 期	備 考	遺物番号	図	写真
SK 2	1層	陶器	甕	在地 1?	中世?	白石窯?	17-2		
		陶器	碗	唐津系	18c	刷毛目文	17-8		
		陶器	鉢	堤	18c~	灰釉	17-5		
		陶器	碗	大堀相馬?	18c~	淡青色釉	17-4		
		陶器	壺	大堀相馬	18c~	胎釉	17-6		
		陶器	不明	大堀相馬	18c~	灰釉	17-9		
		陶器	擂鉢	不明	18c~	鉄釉	17-3		
		磁器	碗	瀬戸	19c	染付	17-7		
	上部	磁器	碗	肥前	19c?	染付	17-7-1		
		陶器	壺	不明	18c~	内灰釉外なまこ釉	28-2		
埋土	上部	陶器	擂鉢	堤	18c~	鉄釉	28-3		
		陶器	碗	大堀相馬	18c~	上灰釉 下鉄釉	28-7		
		陶器	碗	大堀相馬	18c~	灰釉	28-11		
		陶器	香炉	大堀相馬	不明	鉄釉 内白濁釉	28-8		
		陶器	不明	大堀相馬	18c~	外青釉 内白濁釉	28-10		
		陶器	皿	不明	19c		28-5		
		磁器	皿	肥前	18c 代	染付 高台鋲 見込み五弁花	28-4	23-1	79-7
		磁器	碗	肥前	18c~	染付	28-7-1		
	埋土	磁器	碗	肥前	近世	染付	28-9		
		磁器	碗	瀬戸	19c 前半	焼き黒(船ガラス)	28-6	23-3	79-8
		陶器	鉢	常滑?	中世	内面に滑面	24-2	21-7	
		陶器	甕	常滑	中世	受け口状口縁部	24-2-1	22-3	78-7
		陶器	壺	常滑	中世		32-3		
		陶器	甕	在地 3	13c 後~14c 前		32-1-1		
		陶器	丸皿	美濃(吉野)	16c~17初	長石釉	24-3		
南側の井戸	南側の井戸	陶器	擂鉢	堤	18~19c	鉄釉	24-5		
		陶器	鉢	堤	18~19c	なまこ釉	24-6		78-14
		陶器	不明	大堀相馬	19c~	黒青色釉	24-4		
		陶器	鉢	不明	近世	鉄釉	32-2		
		磁器	皿	中国	16c 後半	見込み玉取獅子文	32-6	23-2	79-5
		磁器	碗	肥前	18c	染付見込み蝶	32-4	23-4	79-9
		磁器	碗か鉢	肥前	近世	染付	32-5		
南側の井戸	南側の井戸	磁器	壺	肥前	近世	染付	32-7		
		陶器	甕	在地 5	中世		35		

表3. 陶器・磁器観察表 II

造構層	種類	器種	産地	時期	備考	遺物番号	図	写真
SK 4 1層	陶器	壺	堤?	13c~19c	鉄軸	12-3		78-15
	陶器	甕	常滑	中世		12-4		
	瓦質土器	鉢	不明	15c~16c		12-2		
SK 6 埋土	陶器	甕	在地3	13c 後~14c 前		130		
SK11 埋土	陶器	甕	渥美	12c~13c	自然釉	22		
SK13 埋土	陶器	碗	瀬戸美濃	18c	飴釉白濁釉 白濁釉流し掛け	16	23-9	79-1
	土師質土器	皿		近世	ろくろ調整	13-1	23-10	79-11
	土師質土器	皿		近世	油煙付着 燈明皿	13-2	23-11	
SK15 埋土	陶器	罐鉢	岸窓系	17c		33-4	23-7	78-9
	陶器	罐鉢	岸窓系	17c	鉄軸	33-7	23-8	78-10
	陶器	罐鉢	岸窓系	18c 以前	鉄軸	36-6		78-11
	陶器	鉢?	堤	18c~	鉄軸	33-3		
	陶器	鉢?	堤?	近世	鉄軸	36-3		
	陶器	焙烙	堤	近世		33-5		
	陶器	罐鉢	堤?	18c~	鉄軸	33-1		
	陶器	罐鉢	堤	18c~		37-2		78-12
	陶器	罐鉢	瀬戸美濃	18c	鉄軸	33-2		78-13
	陶器	大鉢	唐津系	18c		33-6		
	陶器	碗	大堀相馬?	18c~	淡青色釉	33-11		
	陶器	碗	大堀相馬	18c~	灰釉	36-1	23-5	
	陶器	碗	大堀相馬	18c~	灰釉	36-2		
	陶器	土瓶	大堀相馬	18c~	下部露体	37-5		
	陶器	土瓶	大堀相馬	不明	底部	33-10		
	陶器	土瓶?	大堀相馬	19c	山水文	37-3		
	陶器	甕	不明	13c~14c		33-8		
SK19 3層	磁器	皿	中国	16c 後半?	高台に砂付着	37-4-1	23-6	79-6
	磁器	皿	肥前	18c	高台	33-9-1		
	磁器	碗	肥前	18c	染付	33-9		79-10
	磁器	碗	肥前	18c~	染付	37-4		
	磁器	瓶類	肥前	18c?	徳利か茎、草木文	131		
S K25 1層	白磁	碗	中国	13c~14c	無文	50	22-1	
SK26 2b層	陶器	甕	常滑	中世		89-1		
	陶器	甕	常滑	中世		89-2		
SK29 理上	陶器	甕	在地5	中世	押印あり	99-3	21-2	
	陶器	甕	常滑	中世	砥などに転用	101-3	21-1	78-1
S K30 埋土	陶器	鉢	在地4	13c 後~14c 前		107-1	21-3	
	陶器	鉢	在地4	13c 後~14c 前	漆締ぎ	113	21-4	78-2

表4. 陶器・磁器観察表 III

遺構	層	種類	器種	産地	時 期	備 考	遺物番号	図	写真
S K31	最下層	陶器	甕	不明	中世	在地ではない	106-1		
		陶器	甕	常滑	中世		106-2		
S K32	埋土	陶器	甕	在地 5	13c 後~14c 前	押印帯	127	21-6	78-3
S D11	1 層	陶器	?	大堀相馬	18c~	鉛釉	48-1		
S D27	埋土	陶器	甕	常滑	中世		108-1		
		陶器	甕	常滑	中世		108-4		
		陶器	甕?	常滑	中世		109-1		
		陶器	甕	常滑	中世		109-2		
		陶器	鉢	山茶窓窓系	13c?		108-5	21-5	
		陶器	甕	在地 4	13c 後~14c 前		108-2		
S D45	3 層	青磁	碗	中国	12c 後半	櫛縞蓮弁文	120	22-2	79-3
		磁器	皿	肥前	19c~	染付	44-2		
		Pit19	埋土	陶器	甕	常滑	中世	押印 1と同一個体?	5
A トレ	II 層	陶器	皿	唐津系	17c 後~18c 前	青緑釉	2-1		
B トレ	II 層	陶器	甕	在地?	13c 後~14c 前		126-3		
C トレ	II 層	陶器	甕	常滑	中世		117-1		
		陶器	皿	瀬戸美濃	近世	灰釉	117-3		
		磁器	皿	中国	16c 後半?		126-2		
		磁器	碗?	肥前	19~20c	色絵	117-2		
A トレ K9 区田層		陶器	甕	常滑	13c 前半	押印	1	22-5,6	78-5,6
		陶器	甕	瀬美	12c~13c		1-1	22-4	
A トレ 14 区表探		陶器	碗	大堀相馬	18c	灰釉	19	23-12	79-2
A トレ 表探 I		陶器	鉢	岸窓系	18c 以前	鉄釉	130		
		2	陶器	擂鉢	岸窓系	18c 以前	鉄釉	131	
		3	陶器	不明	近世	鉄釉	132		
4 (A) トレ		陶器	鉢	不明	近世	鉄釉	133		
3 (C) トレ		陶器	鉢	在地 4	13c 後~14c 前	片口	134		78-4

表5. 陶器・磁器観察表 IV

註1 古墳時代前期の小型の土器と古代の文献にみえる壺は違う系譜のものと理解し、古墳時代前期の小型の上器に壺という名称を与えることは不適当と考え小形鉢と呼ぶ説（辻秀人：1994）もあるが、ここでは從来どおり壺と表記する。

註2 辻氏はII A段階をさらに3段階にわけている。（辻秀人：1993）

註3 近年10世紀第2四半期の年代が与えられている。（小川淳一：1987）

註4 分析に出していないので断定はできないが、市内の遺跡でよく見られる灰白色火山灰と同じものととらえている

註5 在地 1~5 類の分類は南小泉遺跡16~18次の報告に基づく。（佐藤洋：1992）

引用・参考文献（50音順）

- 青沼一民・長島栄一 1983 「中田畠中遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第53集
- 氏家和典 1957 「東北土器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 太田昭夫 1980 「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第71集
- 太田昭夫 1994 「中田南遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第182集
- 大友 透 1994 「仙台東道路関係遺跡」『名取市文化財調査報告書』第33集
- 小川淳一 1987 「五本松窯跡」『仙台市文化財調査報告書』第99集
- 桜原洋他 1990 「東北大埋蔵文化財調査年報3」東北大埋蔵文化財調査委員会
- 川名秀一 1994 「元袋遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第188集
- 工藤哲司 1985 「柳生」『仙台市文化財調査報告書』第95集
- 佐々木和博 1984 「鹿島遺跡・竹之内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第101集
- 佐藤甲二 1984 「後河原遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第71集
- 佐藤甲二 1985 「中田畠中遺跡第2次調査」『仙台市文化財調査報告書』第78集
- 佐藤 淳 1994 「昭和北遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第186集
- 佐藤 洋 1987 「六反田遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第102集
- 佐藤 洋 1992 「南小泉遺跡第16~18次」『仙台市文化財調査報告書』第140集
- 佐藤則之 1992 「伊治城跡」『築館町文化財調査報告書』第5集
- 紫桃正隆 1973 「史料 仙台領内古城・館」
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』多賀城跡調査研究所
- 高橋徳朗他 1990 「東北の陶磁史」福島県立博物館図録
- 辻 秀人 1993 「東北南部における古墳出現期の様相」「シンポジウム 2 東日本における古墳出現過程の再検討」日本考古学協会
- 辻 秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年その1」東北学院大学論集
- 辻 秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年その2」東北学院大学論集
- 土岐山武 1980 「安久東遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第72集
- 丹羽 茂 1983 「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集
- 丹羽 茂 1985 「今熊野遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第104集
- 町田洋・遠藤邦彦 1984 「チフタと日本考古学」「古文化財の自然科学的研究」古文化財編集委員会
- 松本秀明 1994 「仙台平野の成り立ち」『仙台市史・自然編』
- 真山 悟 1981 「東山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集
- 真山 悟 1981 「家老内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集
- 平凡社 1981 「日本やきもの集成」
- 結城慎一 1985 「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第76集
- 横田賢次郎 1983 「太宰府条痕跡II」『太宰府市の文化財第7集』
- 渡部弘美 1983 「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第55集
- 渡部弘美・主張光鶴 1984 「戸内遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第70集
- 渡部弘美 1987 「元袋III遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第103集
- 渡部弘美 1994 「今泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第185集
- 渡部弘美 1993 「山田条里遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第170集
- 渡辺 誠 1981 「もじり編み用木製錘の考古資料について」考古学雑誌第66巻第4号

写 真 図 版





写真1 Aトレンチ全景（南から）



写真2 Bトレンチ全景（西から）



写真3 Cトレンチ全景（北から）



写真4 Aトレンチ南壁（SK2井戸跡付近）



写真5 Cトレンチ西壁（SD43溝跡付近）

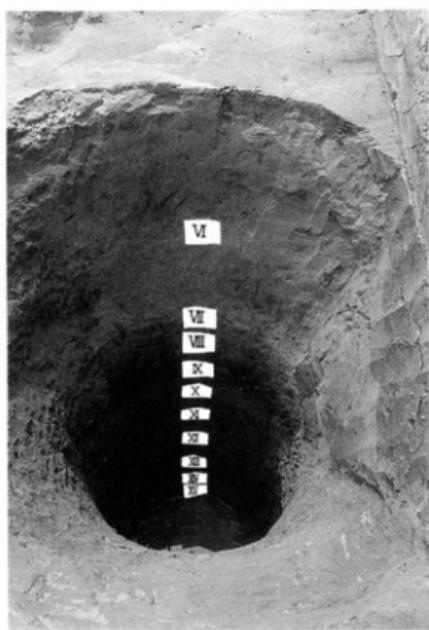


写真6 VI層以下基本層序（SK4井戸跡の壁）

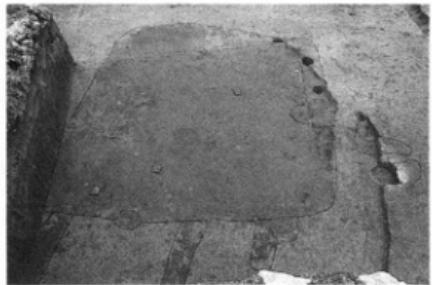


写真7 SI1住居跡確認状況（南から）



写真8 SI1遺物出土状況（北西から）



写真9 SI1カマド断面（南から）



写真10 SI1カマド（西から）



写真11 SI1貯蔵穴断面（西から）



写真12 SI1住居跡（東から）

写真13 方形周溝墓確認作業



写真14 方形周溝墓群全景（東から）



写真15 1号方形周溝墓（南東から）



写真16 1号方形周溝墓細部（北から）



写真17 1号方形周溝墓遺物出土状況（北から）



写真18 1号方形周溝墓東側ベルト断面

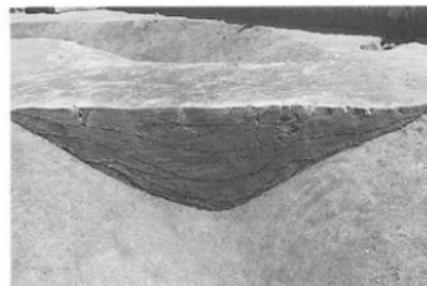


写真19 1号方形周溝墓西側ベルト断面

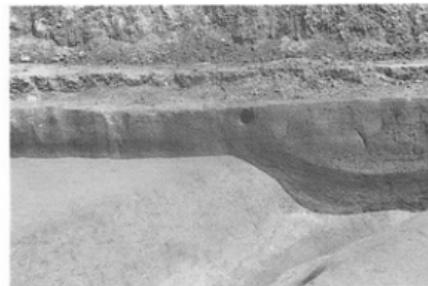


写真20 1号方形周溝墓立上がり断面



写真21 2号方形周溝墓（南東から）



写真22 2号方形周溝墓立上がり断面

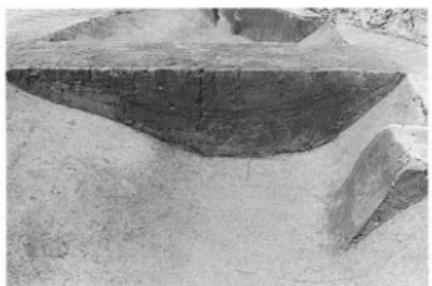


写真23 2号方形周溝墓断面



写真24 3号方形周溝墓断面

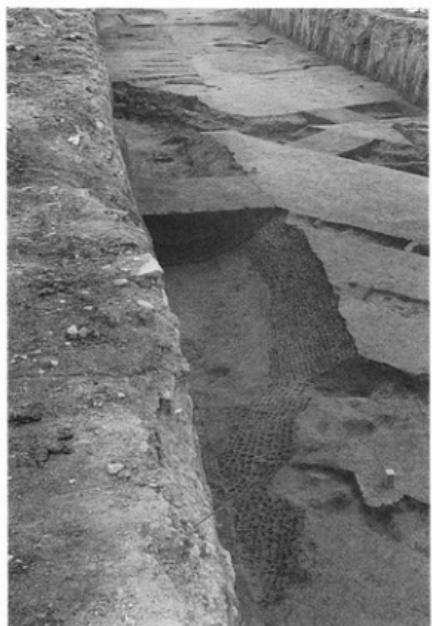


写真25 3号方形周溝墓（西から）



写真26 3号方形周溝墓遺物出土状況（南から）



写真27 3号方形周溝墓遺物出土状況細部（西から）



写真28 SD11溝跡断面



写真29 SD45溝跡（東から）

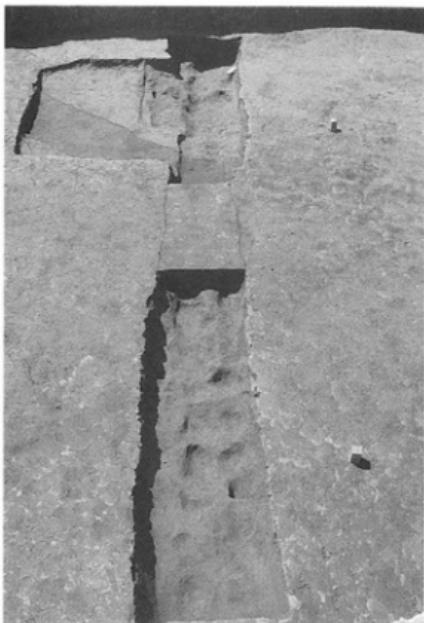


写真30 SD24溝跡（北から）



写真31 SD26・27溝跡（北から）



写真32 SD27溝跡断面



写真33 SD23溝跡断面

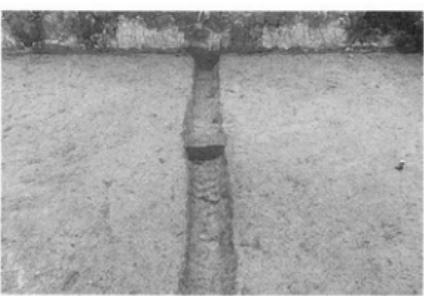


写真34 SD47溝跡（東から）



写真35 SD 4溝跡（東から）



写真36 SD12溝跡（北東から）



写真37 SD43・44・48溝跡（東から）



写真39 SD28・29溝跡（南から）



写真38 SD28・29溝跡・3号方形周溝墓切り合い部断面



写真40 鋤痕確認状況（南から）



写真41 小溝群① SD 7・8・9・10（北から）



写真42 小溝群① SD15・16（北から）



写真43 小溝群① SD19・20・21（北から）



写真44 SD28溝跡と小溝群②（東から）



写真45 小溝群②（東から）



写真46 小溝群③ SD41・42（南西から）



写真47 SD38溝跡（北西から）



写真48 SK 1・2 井戸跡（北東から）



写真49 SK 3 井戸跡遺物出土状況（東から）



写真50 SK 4 井戸跡（東から）



写真51 SK 6 井戸跡（西から）



写真52 SK 8 井戸跡断面

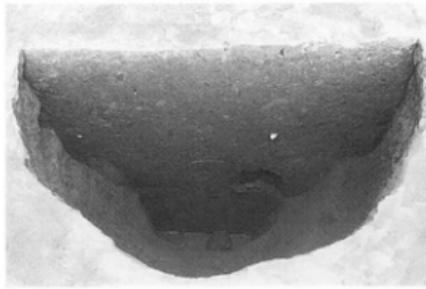


写真53 SK15井戸跡断面



写真54 SK16井戸跡断面



写真55 SK 5 土坑（北から）



写真56 SK12土坑（東から）

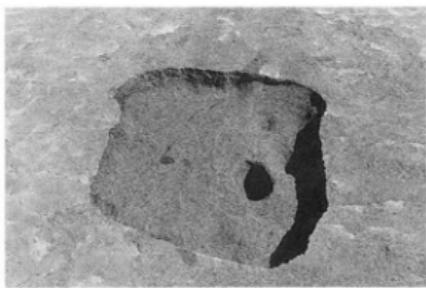


写真57 SK34土坑（北から）

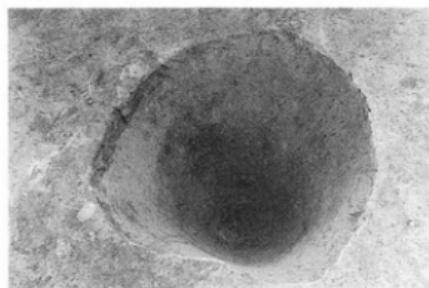


写真58 SK14土坑（北東から）



写真59 SK13土坑遺物出土状況（南から）



写真60 SK17井戸跡（西から）



写真61 SK19土坑（西から）



写真62 P～R・1～2区土坑群確認状況（南から）

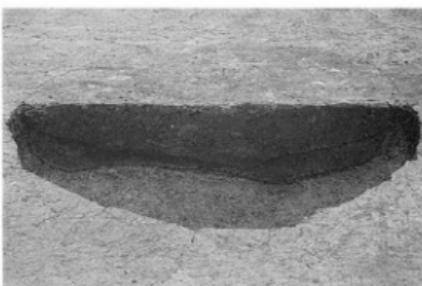


写真63 SK21土坑断面



写真64 SK22土坑遺物出土状況（北から）



写真65 SK22土坑（北西から）



写真66 SK26井戸跡（西から）



写真67 SK27井戸跡（西から）



写真68 SK29井戸跡断面（西から）



写真69 SK32土坑断面

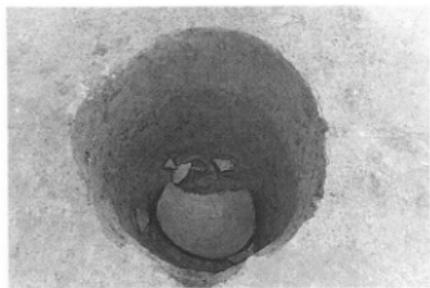


写真70 SK32土坑遺物出土状況（西から）

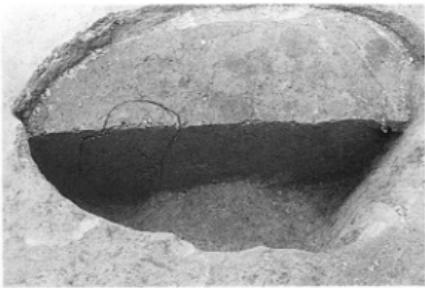


写真71 SB 2 掘立柱建物跡ピット②断面

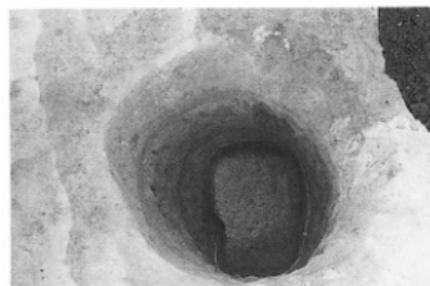


写真72 SB 1 建物跡ピット①（南から）

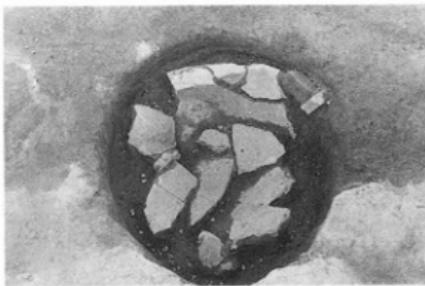


写真73 ピット19遺物出土状況（北西から）



写真74 SA 1 掘立柱列（北から）

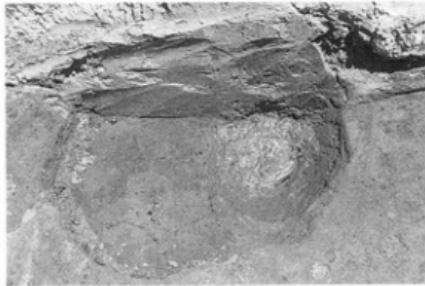


写真75 SA 4 掘立柱列ピット①（西から）

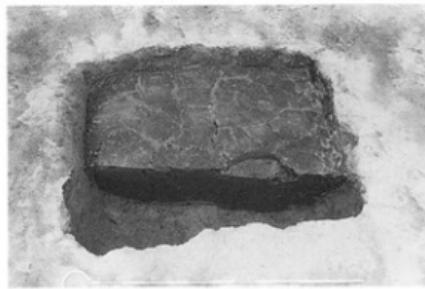


写真76 SA 1 掘立柱列北端の柱穴断面

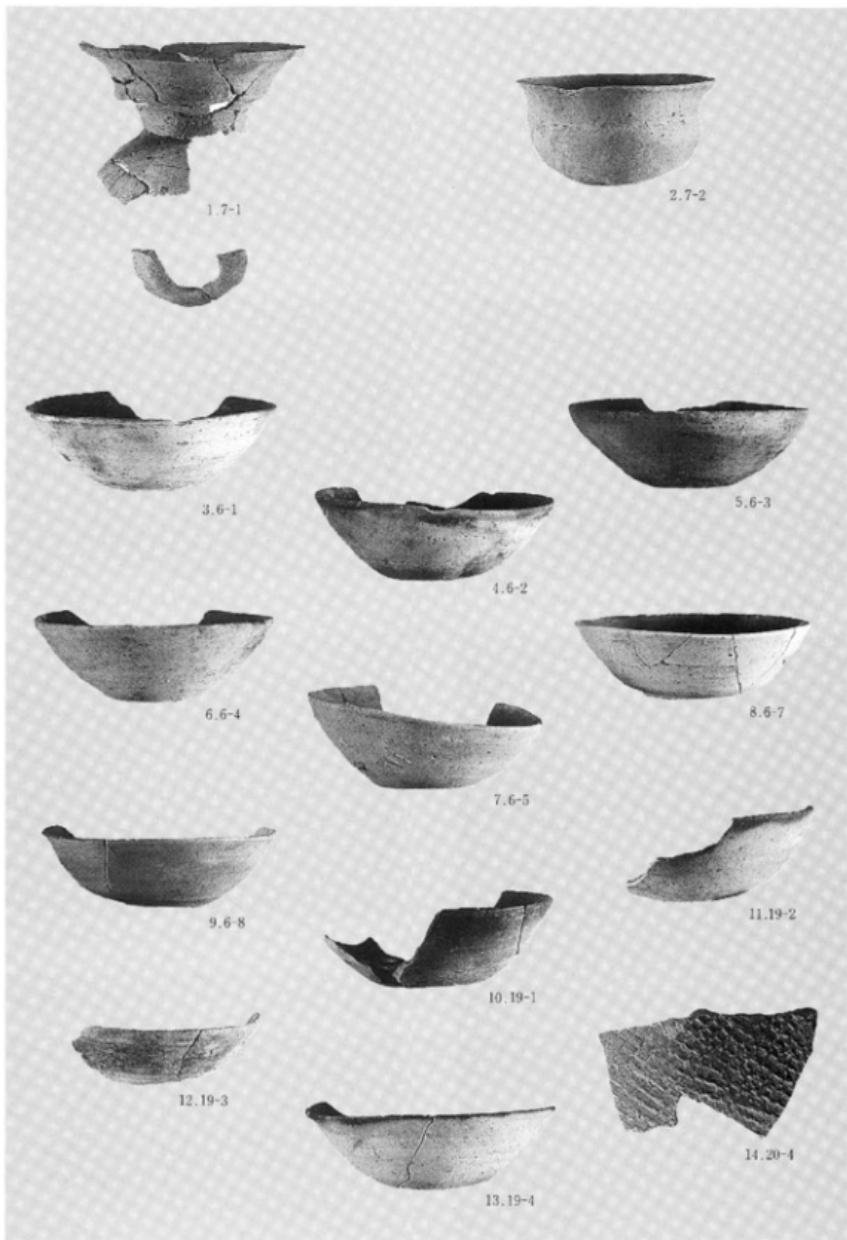


写真77 土師器・須恵器

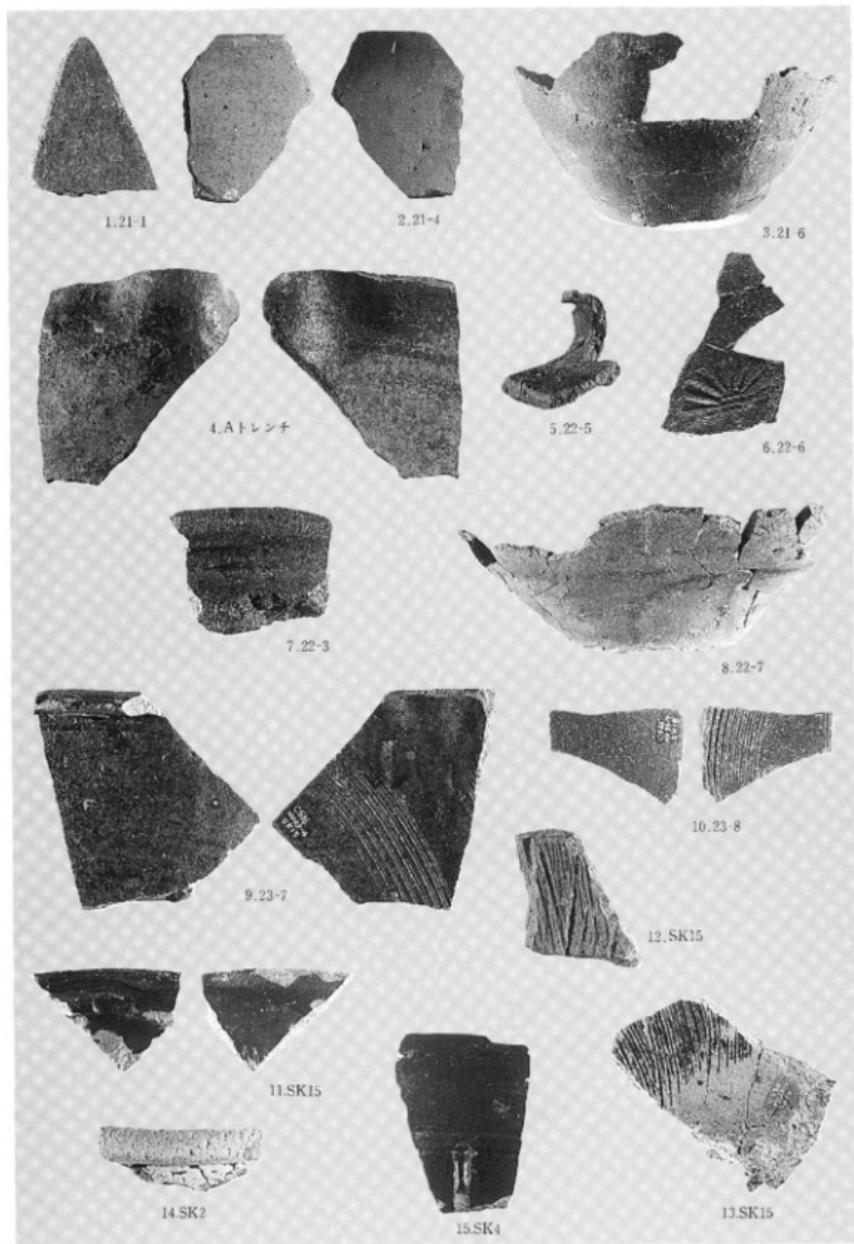


写真78 陶器

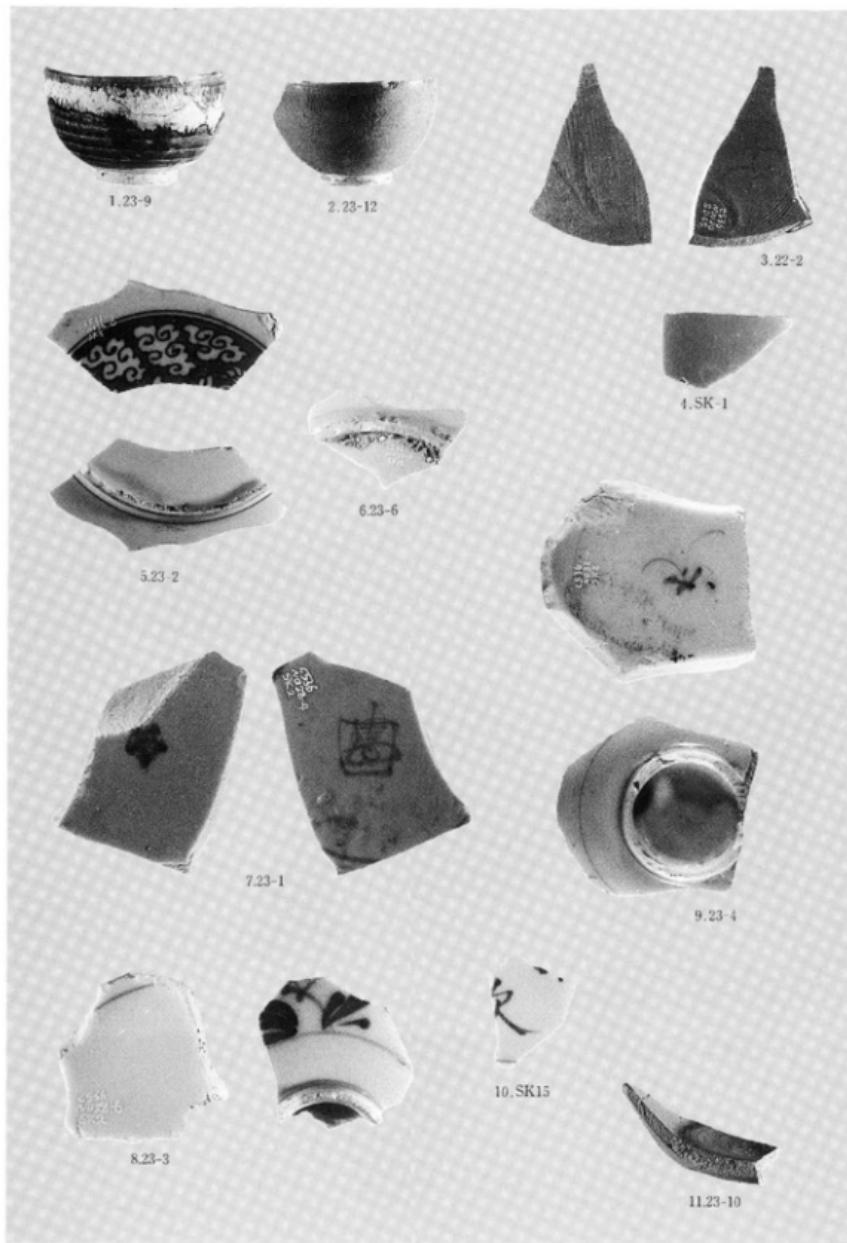


写真79 陶器・磁器

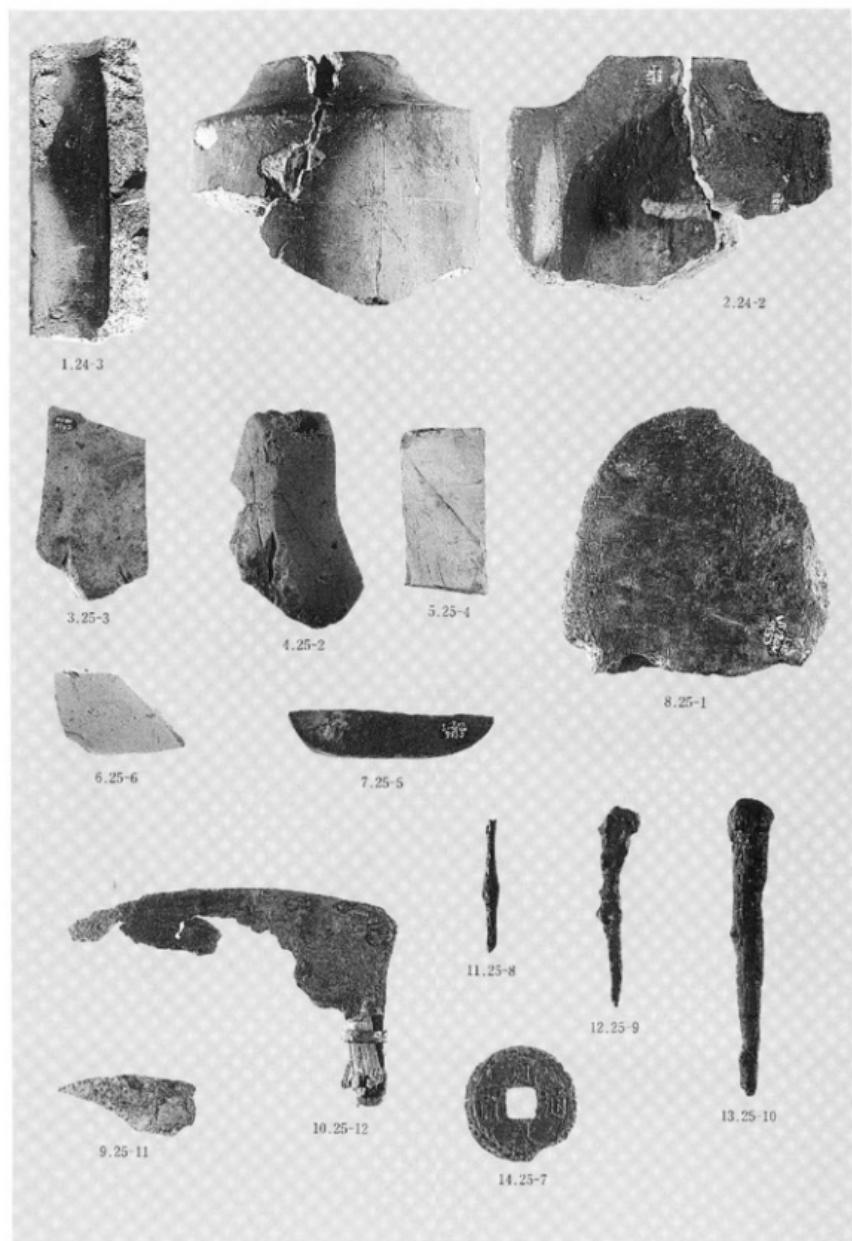


写真80 瓦・石製品・金属製品



写真81 木製品

報告書抄録

ふりがな	しろうまるたてあとはくつちょうさほうこくしょ						
書名	四郎丸館跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第200集						
編著者名	竹田幸司 渡部弘美						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-71宮城県仙台市青葉区国分町3-7-1 TEL 022-214-8894						
発行年月日	1995年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
しろうまるたてあと 四郎丸館跡	みやぎけんせんばいし 宮城県仙台市 たいひくし しろうまる 太白区四郎丸 あざと ゆうわ 字戸ノ内93外	04100	01240	38° 11' 08"	140° 55' 15"	19940411 19940630	1100 宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
四郎丸館跡	城館	古墳 平安 中世 近世	方形周溝墓 豎穴住居跡 土坑 井戸跡 溝跡 掘立柱建物跡 掘立柱列		土師器壺・坏 ロクロ使用土師器坏 赤焼土器坏 中世陶器甕 近世の磁器 木製品 金属製品		

仙台市文化財調査報告書第200集

四郎丸館跡

——発掘調査報告書——

平成7年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3-7-1

印刷 ㈱東北プリント
仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

